大学生のための LGBTQ+ライフブック Vol.4

お坊さんたちのライフストーリーズ

龍 谷 大 学

はじめに

「父親には絶対にカミングアウトできません」

ある学生のその一言がずっと気になっていました。その学生の実家はお寺で、お父様は住職だったのです。すべての人をすくいとってくださるという仏さまの身近にいる人に、自分のセクシュアリティやジェンダーアイデンティティを素直に伝えられない。きっと同じような苦しみを抱えている人がおられるのではないでしょうか。

いま、「LGBT」や「LGBTQ+」という言葉は多くの人が知っています。しかし、その一方で性的マイノリティへのヘイトは後を絶ちません。同性愛や同性婚が伝統的な家族を崩壊させるとか、トランスジェンダーを犯罪者扱いするような言説が吹き荒れています。このことは決して他人事ではないはずで、私たち自身も、知らず知らずのうちに差別に加担してしまっているかもしれません。

本冊子は、Vol. 1 「先輩たちのライフストーリーズ」、Vol.2「それぞれの結婚のカタチ」、Vol.3「みんなのキモチ」に続く第 4 弾です。宗教者もそうでない人も是非読んでいただきたいです。なお、前号まではシリーズ名を「大学生のための LGBTQ サバイバルブック」としていましたが、「マイノリティがサバイバルしないといけないのは変じゃない？」 ということで今号から「LGBTQ+ライフブック」としています。また、タイトルが「お坊さん」となっていますが、お坊さんだけでなく、お坊さんとご縁のある人や神道の方からも寄稿いただきました。執筆者のみなさまに心から感謝を申し上げます。

2024 年 3 月

龍谷大学 宗教部

大学生のための LGBTQ+ライフブック　Vol.4

お坊さんたちのライフストーリーズ

目 次

「弱さ」とともに柔軟に生きる強さ　（宮木リー啓輔）…… 4

マイノリティとして生きる　（多賀　法華）…… 16

平等覚に帰命せよ－偏った正義をこえて－　（釋　優　顯）…… 26

「神主さん」たちのライフストーリー、
あるいは門とノイズの話　（楽丸こぼね）…… 41

LGBTQ 当事者としての私のこれまで、これから
（太田　利宏）…… 58

性的マイノリティの居場所創り　（柴谷　宗叔）…… 80

大学生のための LGBTQ+ライフブック Vol.4

お坊さんたちのライフストーリーズ

LGBT、LGBTQ、LGBTQ+などの表現は、できる限り執筆者の意向に沿って記載しました。また宗教・宗派によって教義や呼称、作法などが異なりますのでご理解ください。

「弱さ」とともに柔軟に生きる強さ

宮木 リー 啓輔

この本を手に取った皆様の中には、LGBTQ 当事者もいれば、知り合いや家族に LGBTQ 当事者がいるという人もいるでしょう。他人には言えない悩みを抱えて生きている方もいるかもしれません。卒業後の進路に迷っていたり、学生生活で困っていることがあったり、または人間関係や自分自身のこと、生きる意味で悩んでいたり。そのような考えや悩みに役に立つのかどうかは分かりませんが、私のゲイライフストーリーを紹介します。皆様への応援メッセージとして読んでいただければ幸いです。

現在、私はアメリカ西海岸カリフォルニア州のサンフランシスコに住んでいます。仕事は、サンフランシスコ市立総合病院のチャプレンです。この病院は「トラウマセンターレベル I」といって、保険や ID がない患者でも、たとえ犯罪が絡む傷害事件の加害者でも、すべての人に救急救命を施すための、社会のセーフティネットの役割があります。患者の半数以上は、社会経済的に最も生存が困難とされる層（ホームレス・移民貧困層・薬物使用者・精神疾患の患者・独居高齢者など）です。また、自然災害や大規模テロなど有事の際の医療拠点としても、重要な役割を担っています。

「チャプレン」とは、病院・ホスピス・刑務所・軍隊など非日常を余儀なくされる環境下で、人々の心のケアサポートを行う宗教者のことです。私の場合は職場が病棟なので、患者とその家族・友人への宗教精神

的サポートをおこなうのが職務です。平たく言えば、病気で悩んでいる人々へ「つらい時は一人で悩む必要はないよ」「その苦悩は、あなたの人生にとってどういう意味があるのだろうね」というメッセージを、儀礼や対話を通じて分かち合い、伝えていく役割です。自死を望む人や、虐待のケースに介入することもあります。また、チャプレンは、人々の持つ宗教文化の代弁者の役割も持っています。例えば、ラマダンの断食期間にはムスリム患者へのサポート、病室や霊安室内で患者やその家族・友人が希望する儀礼（読経・瞑想・祝福・祈りなど）、近隣の寺社教会で活動している宗教者への訪問の依頼、さらには医療チームの同僚が事故や病気などで突然亡くなった場合のグリーフケアなど。その活動範囲は多岐にわたります。サンフランシスコは多言語・多宗教・多文化の地なので、仏教徒のチャプレンだからといって仏教の人だけに対応するのではなく、患者とその家族・友人がどのようなバックグラウンドを持っているかの情報をもとに、アセスメントとケアプランを立てていきます。宗教者が自身の教義を啓蒙布教するのではなく、その教えに生きる自分を支えとして、相手の異なる宗教や文化、または感情や人との関係性を理解していく職業です。2020 年のコロナ禍以降は、チャプレンが医療従事者の燃え尽き症候群を防ぐ役割も担うようになり、「同僚スタッフへのケア」が新たなチャプレンの開拓分野として浮上してきました。

病院側としては、患者に医療ケアプランに積極的に参加してもらい、早く退院して自立した生活を送って、次の入院患者のために病室を空けてもらわなければなりません。また退院が見込めない場合は、なるべく患者とその家族の尊厳や自己決定権を守りつつ、倫理的に正しいとされる範囲内で、満足のいく形で最後を迎えてほしいわけです。これがかな

り難しいのです。チャプレンは、その医療チームの期待も密かに背負いつつ、患者自身がもつ心の力強さや柔軟性、生活の中にある支えとなりうるべき要素を引き出していきます。この要素を英語で、Resiliency（レジリエンシー）や Coping Mechanism（コーピング・メカニズム）といい、患者の数と同じだけパターンが存在し、多様性に富んでいます。宗教教義における意味づけであったり、親や祖父母から聞いた話であったり、何気ない日常の習慣であったり。辛いときに支えとなるもの、そしてまた日常に戻っていける順応性とでもいいましょうか。そして、チャプレンが患者との会話から探して見つけ出すのではなく、チャプレンは患者自らが探して見つけていくのを促し、支えるだけです。これはよく自動車運転のたとえで語られます。車の運転手は患者で、チャプレンはあくまでたまたま乗り合わせた同乗者。患者が自ら進むべき道を見つけて運転するのであって、チャプレンが代理の運転手としてハンドルを握るわけにはいかないのです。多少の道案内ぐらいはできるかもしれませんけどね。

チャプレンミーティングの様子

患者やその家族の悩みが、LGBTQ に関わる諸問題であることもよくあります。特に社会からトランスジェンダーの方々への抑圧は極めて深刻で、その性表現を受け入れられない肉親や近隣住民からの暴力や迫害に遭い、入院に至るケースも。また、チャプレンは社会的に孤立した LGBTQ 患者や、そのグリーフのケアなどもよく担当します。こういっ

た悩みは、患者の側からすると、大っぴらに医療従事者には話せないこととして浮上してきます。病棟での噂話のタネになるのではないか、ぞんざいなケアしかしてもらえなくなるのではないか、という懸念または恐怖が常にあります。（逆に、宗教者に対してのトラウマがあって、チャプレンに対する嫌悪感をあらわにする方もいます。）

このような精神ならびに宗教的なケアの現場では、チャプレンが自らの内なる偏見や心的トラウマを冷静にとらえ敏感になることが非常に重要になってきます。というのも、自らの「弱さ」に気づきそれを自らの一部として客観的に見ることができないケア提供者は、その内面に気づかないまま自分自身の心の傷を覆い隠す必要が出てくるからです。すでに偏見が内在化されてしまっている場合、本人は常に自らに蓋をしていることすら気づかないかもしれません。また、宗教者という社会的立場または宗教的権威によって見えないようになっている場合もあります。たとえば、LGBTQ であることが原因で親との関係に悩む（または死別した親との関係性が未解決の）チャプレンは、患者と患者の親のいさかいや、患者が親としての役割に悩んでいるケースに相当苦労するでしょう。自らの内なるトラウマや偏見が認識されていない場合、どちらかの肩をもって余計な一言を発してしまったり、そのケース自体を何とか解決しようと固執したり、逆になるべくかかわらないようにしたりと、患者が本当に必要としていることに向き合うことなく、無自覚のままケア提供者自らの内なる未解決のニーズに翻弄される結果になるわけです。そして、そのような内面の「弱さ」や道具として覆い隠すための「権威」が、母国で公用語を母語として使い、高等教育を受けたというステータスであったり、または男性であることであったりする場合、その権威自

体が自らの抱えた盲点だと気づかないままいることで、ケア対象者に甚大なる心の傷跡を残すことになります。

渡米前の私は、ゲイであることをひた隠しにして生きていました。中学２年ぐらいから薄々気づいてはいたものの、なんだか汚いことのような、家族や周りに公言してはいけないような、そんな感覚があったのです。このような同性愛に対する嫌悪は、親から言われたわけでも、宗教の教えがあったわけでもありません。ただ、小学校や中学校の教室、またはテレビ番組などで、同性愛者が普通ではない存在であり、冗談として笑っていいものとして扱われるたびに、その「普通ではない人」に対する文化的な規範メッセージが、次第に自分の中で当たり前のこととして根付いていったのでしょう。大学院修了後本願寺に就職してからも、男性優位かつ保守的な世襲制の仏教界に馴染めませんでした。このころは、仏教徒である自分とゲイである自分を別のものとして認識していたような気がします。当時は家族からも仏教界からも完全に孤立していました。家族へのアウティングや、強制カミングアウトの結果、私がゲイであるということが「無かったこと」にされたなど、今でも沈痛の思いがいたします。４年間、本願寺組織内でのハラスメントに思い悩んだ末、2012 年に離職後、単身渡米しました。

渡米自体は３ヶ月だけの旅行のつもりでしたが、今や 11 年目です。永住を決めた理由のひとつに、サンフランシスコ仏教会との出会いがありました。このお寺は、西本願寺北米開教区の拠点となるお寺です。2012 年当時の開教使はロナルド・小畑先生でした。先生は、私の渡米の経緯などをひとしきり聞いた後、「ユニークだね！啓輔の経験はいずれ、LGBTQ として悩んでいる人々の支えになるでしょう。とっても有難い

ことだ」とおっしゃったのです。日本での私の苦悩が「ユニーク」？ 今まで考えたこともなかった発想に驚くとともに、周りを見てみたらお寺にはすでにたくさんのLGBTQ当事者、またはサポートしてくれるメンバーの方々がいらっしゃったのです。小畑先生は、性差別や人種の諸問題に精力的に関わる開教使として活躍をされていたので、そういう悩みを抱えた人々が自然と集まっていたのでしょう。普段は、ジョーク好きで飄々としている方なんですけどね。このお寺は1970年代に同性仏前結婚式を全世界に先駆けて執り行った場所だと伝えられています。このような歴史的背景をもつお寺だからか、またサンフランシスコがLGBTQの文化とともにあるからか、現在、サンフランシスコ仏教会の開教使チームは、ほぼ全員がLGBTQ当事者で構成されています。一度、ゲイであることと仏教徒であることが相反し、仏教徒であることをやめた私が、ここアメリカの地で再び仏教と出逢い、このお寺で同性結婚式を挙げ、チャプレンとして生きるとは思ってもいませんでした。人生どう転ぶか分からないものです。

ゲイであるのに、人一倍同性愛への嫌悪が強かったことはとても皮肉なものです。この自分自身に対する嫌悪については、なかなか直視することができなかったのですが、2016年の仏前結婚式に際し、サンフランシスコへ来てくれた7歳の姪が明らかにしてくれました。当時、私は7歳の姪と11歳の甥に対し「あなたの叔父はゲイで、アメリカ人の男性とお寺で結婚式を挙げるんだよ」という現実をどのように伝えたものかと悩んでいました。両親や姉に伝えるのにも一苦労したのに、小学生の子どもにはどうしたらいいのか頭を抱えたものです。開口一番「叔父さんは男の人なのに、どうして男の人と結婚するの？」と子どもたち

が純粋無垢な気持ちで発した際、私はうまく答えることができませんでした。酷い話ですが自分でも、自分がゲイであるということの理由がよく分かっていなかったからです。姉が「叔父さんたちはね、愛し合っているから結婚するの。お父さんお母さんと一緒。日本ではできないけど、アメリカならできるんだよ。」と、助け舟を出してくれたので、その場はなんとか事なきを得ました。姪たちは分かったような分からなかったような不思議な顔をしていましたが。その後、私と夫は、日本から来た私の母や子どもたちの手前、びっくりさせないようになるべく手をつながないようにしようとか、文化的な配慮をしていたものです。ある日、両家族のために市内を観光案内していた時のことです。姪が後ろから私と夫のもとへ駆け寄り「叔父さんたちは結婚するんでしょ！手をつないで歩かなきゃ！」と二人の手を取り、繋いだのです。私は姪の可愛らしい気遣いに微笑ましく感じながらも、大きな衝撃を受けました。私が 30 年かかってようやく受け止め始めた「ゲイ」であることを、この 7 歳の子はたった 1 日で受け止め、当たり前のこととしてひとっ飛びに乗り越えていった。なぜだろう？と。7 歳の姪は「ゲイ」という言葉も聞いたことなければ、そういった人々に出会ったこともありませんでした。そして、私が学校や職場で経験したような「普通ではない」人々に対する揶揄や嘲笑も、全く知らなかったのでしょう。無知であったからこそ、自分の中にそういった差別の温床となるステレオタイプによる偏見が存在しなかった。むしろ、外国に遊びに行けるし、周りが嬉しそうにしているから、ゲイであることはちょっと珍しいかもしれないけど、とても良いことなのだと認識したわけです。だから、姪はわずか 7 歳にして男同士の結婚に対して、皆の反応を頼りに、素敵なことだとし

2016 年 3 月 27 日　仏前結婚式の様子

て受け止めることができたのです。

自らの心に巣くう、内在化されたゲイに対する嫌悪感に気づいてからは、どうやったらその嫌悪感とともに生きることができるだろうか、どうやったらゲイである自分を認めることができるだろうか、と考え始めました。今でこそ、LGBTQ の患者やその家族に対して冷静に、そして丁寧なケアを施すことができるようになりましたが、チャプレンのインターン時代は苦労したものです。私がゲイであるということは、見た目からでは分かりません（歩くカミングアウトなので、分かる人は見たらすぐ分かるでしょうけど）。患者やその家族が、LGBTQ とそれに関する政治運動を間違っていることだとして非難し始めたり、患者本人がゲイであることの罪深さを懺悔し始めたりすると、チャプレンとしての冷静さを失ってしまうことも多々ありました。その非難や懺悔は、別に私に向けられたわけでもないですし、私のゲイとしての人生やアイデンティティとは全く関係ないこと、もしくは文脈が異なるにも関わらずです。

日本の仏教、特に真宗学は男性中心史観で、全くと言っていいほどジェンダーや性的少数者に関する視点が欠けていたと感じています。私が日本にいたときからすでに 10 年以上の年月が経っているので、多少は変わったかと期待していますが。仏典が編纂・研究された時代には、LGBTQ というカテゴリーやジェンダーの観点が仏教界にあったわけではないので、現代の視点からの批判は不毛であり、現代の知識をもって論議することはできません。ただし、生きとし生ける衆生をすくうことが仏の生起本末であるならば、LGBTQ ということで悩み苦しむ現代の人々も仏の慈悲によりすくわれなければなりません。私もゲイであることや LGBTQ に関するネガティブなものの見方に無知のままでいられたのであれば、どんなに楽であったことでしょう。私の場合はすでに深く恐怖体験として内在化されていたので、それをえぐるように掘り起こし精査し、人と語り合うことで、自らを納得させるしかなかったのです。

チャプレンを目指すようになってから、地元の大学でコースを取り、地域 LGBTQ コミュニティの集まりに参加し、英語で仏典を読み、LGBTQ の歴史から心理学、社会学、性病や薬物使用に関する医学、女性の視点に立った仏教史観まで、幅広く学び直しました。チャプレンとして働く今も、続けています。そのおかげか 40 年近く経って、ようやくゲイである自分と仏教徒である自分のアイデンティティが合致しました。ゲイの仏教徒でアジア系移民であるというインターセクショナリティ（複数のアイデンティティが重なり合うこと）を、忌避するべきことではなく、自分の大切な一部分であると認識すること。それによって、今まで何気なく読んでいた経典、聞いていた法話が全く違った視点で心に届くようになったと感じています。日本で高等教育を受けた日本人の

男性として、しかも世襲制のレールに敷かれた人生に生かされていたら、マイノリティから見た物事の機微に気づくことはなかったと思います。多数派に居続ける限り、そういった点に気づく必要もなく、声を上げる必要もなく、ずっと他人の異なる経験や受け止め方に愚鈍なままでも理不尽なことは一切なく、生活は成り立っていきますから。また、レズビアンやトランスジェンダーの同僚と働く中で、私は男であるということに対しても客観的な見方をするようになりました。見た目が男性である限り、仏教僧も似たような状況かもしれませんが、チャプレンとしても社会文化的に優位な点があります。患者やその家族が、男性のチャプレンの訪問のみを受け入れるなど、女性と男性のチャプレンの間で対応を変えることもよく見聞きします。女性のチャプレンにしか施せないケアが存在するにも関わらずです。この点に無自覚であれば、宗教界の構造的な女性蔑視に加担することになりかねません。

私がゲイであることを公言するようになったのは、ここ数年のことです。自らのカミングアウトや家族との義絶（現在は和解）、11 年目になる結婚生活を通じて、またチャプレンとして LGBTQ の患者やその家族をケアする中で、その必要性に気づきました。LGBTQ はストレートの人々に比べて圧倒的に数が少ないので、私が黙っていたら救える命も救えず悩み苦しむ子どもたちも見捨てることになるからです。また、ストレートの人々の間にもグラデーションが存在します。自らの性的指向や性表現がグレーゾーンにあるにも関わらず、無理をしてストレートかそうでないか、の二択に自らの生活を縛りつけたがゆえに、悩み苦しむ人々もいます。理想としては、わざわざカミングアウトをする必要がない社会を作り上げることですが、一度築き上げられた偏見や構造的な規範を

是正していくには、カミングアウト可能な人がしていくほかないのだと感じています。カミングアウトできない人やしたくない人には、強制するつもりはさらさらありません。命や生活の安全を確保するために、クローゼット生活を続けるのであれば、それは致し方ないことであり、また私が選んだ生き方より賢い生き方であるでしょう。

しかし、そういった生き方ができずに悩み苦しむ人々のため、この度応援メッセージを送らせていただきました。最後に、教行信証の信巻「逆法摂取釈」の涅槃経引文で、耆婆大臣が阿闍世王をケアサポートする箇所を載せておきます。私がゲイの仏教徒として、人生の中で一番大切な問い、「私は、悩み苦しみとどう『在り続ける』のか」のヒントとして、常に日頃から反芻している部分です。詳しい内容は、ぜひ大学の先生や地域のお寺さんに聞いてください。生来疎まれて育った阿闍世王が暴虐の限りを尽くし、先王の父を殺し、母を幽閉した後、病に倒れます。そこに６人の大臣（医師）が訪れ、王を慰めつつなだめたり、苦悩を矮小化したり正当化したりしますが、一向に心身の病はよくなりません。そこで、登場するのが耆婆大臣。彼は王（患者）のありのままの姿と悩みを、温かくも冷静に包み込み、釈尊のケアを紹介します。なぜ仏は王をすくおうとしたのか。それがここに描かれています。アメリカの地で、ゲイのアジア人の移民のマイノリティとして、アメリカの仏教に出会って、英訳仏典を読んでようやく気づいたことなので、以下に英語で引用します。　ご精読ありがとうございました。

2017年 プライドパレードにて

Great King, the world-honored Buddhas do not see sentient beings' family lineage; they do not see young, old, or middle age; poverty or wealth; auspicious times, or astrological sun, moon, or stars; skilled workers, menial laborers, or man or woman servants. They see only sentient beings who possess the good mind. If they have the good mind, the Buddhas compassionately think of them. ... Great King, the light of the moon brings joy to the hearts of all travelers on the road. Such is the samadhi of moon-radiant love, which brings joy to the hearts of those in practice on the path to nirvana. This is why it is called 'the samadhi of moon-radiant love' … Having heard these stories, Ajatasatru said to Jivaka, "Though I have just heard these two kinds of stories, I still feel anxious. Come with me, O Jivaka! I want to ride on the same elephant with you. ..."

マイノリティとして生きる

多賀　法華

ジェンダー平等が、LGBTQ の課題を解決する一つの鍵になると思う。

私は、1979年に島根県雲南市の山奥の寺の長女として生まれました。その後、地元の小学校、中学校、高校を卒業し、広島県の大学に行くも中退。島根に帰り、福祉の仕事に就きました。自分の生まれた故郷のために仕事をしたいと2016年に仕事を辞め、現在は雲南市の市議会議員として働きながら「島根のちょっこしLGBTQ相談室」という任意団体で講演会をするなどの活動をしています。

ジェンダーとは、社会的文化的につくられてきた性差を指します（生物学的な性差のことはセックスといいます）。簡単に言うと「男はこうあるべき」、「女はこうあるべき」など、外見、言葉遣い、地域や職場、家庭での役割などを性別で分けられることです。このように男女で二分されジェンダーバイアスに覆いつくされた社会では、LGBTQ などの人、特にトランスジェンダーの人が、非常な生きづらさを強いられています。

私もそうでした。けれども、“男尊女卑”的な男女の差異が、あまりにも社会の土台に浸透しすぎていて、この生きにくさがどこから来るものなのか、ずっと分からないままでした。おそらく、それは家制度の名残なのではないでしょうか。明治時代の民法の中で家制度が確立し、税金を集めたり男子を徴兵したりするために戸籍制度ができ、一家の長である戸主が家族の主導権を握る。税金をおさめた男性だけに参政権がある。こうして男性主導の社会が政治的

に作られてきました。家制度、戸主制度の影響は、同和問題や優生保護法にも及んでいて、現在もその弊害が至るところに残っています。そうした、血統、家を重んじ、男性を中心とした社会を維持する中で、生活や心の中に浸透し、私たちは、女性や子ども、障がい者や少数者（マイノリティ）を弱者として排除してきたのだと言えます。

男性や納税者以外を弱者として排除する社会、それは過去のことではなく、まさに現在の社会でも続いていて、むしろ先鋭化しているのではないかとすら思います。いわゆる“古き日本の良き社会“を守りたい人にとって、LGBTQ などの性的マイノリティとは、おそらく劣った人なのでしょう。以前、ある政治家が「LGBTには生産性がない」と言う文章を雑誌に寄稿して批判を浴び、これに対して別の政治家が「ゲイもオカマも納税しているから生産しているでしょ」とSNS で発言して火に油を注いだことがありました。では、税金を納めなければ？これは政治家一個人だけの問題ではなく、その根っこにある排除する社会の問題です。知的障がい者施設での傷害事件もそういった優生思想が背景にあるのだと思います。

あれほど学校で「命の大切さ」や「人権の大切さ」を教えられても、現実の社会は、そうではない。それならいっそ「そんな社会なのだ、過去のことではなく今もそうなのだ。」と教えて欲しかった。それとも、そんなことに気づかない私がおろかなのか。社会とはそんなものだと、こういうことを受け入れることができる人が大人と言われるのだろうかと思いました。

さて、ジェンダーというものを知らなかった私ですが、やがて男女の違いに違和感を持つようになります。ちょうど男女とも家庭科の授業と技術の授業を選択できるようになった頃で、男女雇用機会均等法で女性の地位向上につ

いても習っていたので、あまり意識してこなかったのですが、今から思うと最初に違和感をおぼえたのは「一人称」だったように思います。男の子は「僕」で、女の子は「私」。それから「色」。赤やピンクが女の子で、青や黒が男の子。当時はランドセルが赤と黒しかなく、自分が欲しい色と違う色のランドセルを家族からプレゼントされて密かにショックを受けた子はきっと何人もいたと思います。私は、幸いにも黄色いナップサックが選べたので違和感なく受け入れることができましたが、性別に対する違和感を抱くのは、早い子で七五三の3歳の時の衣装だと聞いたことがあります。

小学生の時です。私が生まれ育ったのは浄土真宗の寺なのですが、宗祖の親鸞聖人が得度したのが9歳、なので浄土真宗（大谷派）では9歳から得度することができます。私には一つ下の弟がいて、小学校3年生か4年生の時に弟だけが京都に得度を受けにいったのです。別に私は僧侶になりたかったわけではないのですが、なぜ、弟が選ばれるの？ 私の方が先に生まれたのに。なぜ弟がもう寺を継ぐと決められているの？ 当時の私は、男子の年長者が跡を継ぐという“長男信仰”があるとは知らなかったので、かなりショックでした。こんなことがあって、この頃から30歳頃まで、特に父親に対しての反抗期が続くことになりました。

“長男信仰”に傷つけられたのは、私だけではありません。私の祖母もきっとそうだったと思います。同じ島根とは言え、松江で生まれた祖母は、雲南市というものすごい田舎の山の奥の寺に嫁がされ、先生になる夢があったのに、跡取りを産むために夢をあきらめさせられた。キャリアウーマンで婦人会活動に熱心だった祖母でさえ、「もし男だったら町会議員になっていたのに」と言っていたと聞いたことがあります。体の性が女性である私が、市議会議員にな

れたのは、それでも少しずつ社会が変わってきていると言えるのかもしれません。

話がそれましたが、中学生時代。自分の恋愛対象が女性だと気づき、そのころからだったか、その前からだったかはっきりとは覚えていませんが、制服、スカートを着るのに違和感があり、体操服で過ごすことが多くなりました。女性を好きなのは男性だから男性にならないといけないと思っていたからかもしれません。今では差別用語とされる「オカマ」「おなべ」「ホモ」「レズ」という言葉がよく聞かれた時代、男性にならないといけないと思っていた私は少年漫画を見ながら、力が強くて、スケベなのが男だ！ と自分勝手な男性像をつくっていました。特に背が低いので、大きな声を出したり、乱暴な言葉を使ったり、物を投げたり、自分を大きく見せようとしていました。今思うとなぜそれを理想の男性像と思ったのか。傷つけてしまった人には本当に申し訳なかったと思います。

高校では、体育の時間以外、体操服で過ごすことが許されませんでした。私は相変わらずスカートが苦手だったのですが、一番受け入れらなかったのは制服の赤いリボンです。「服装が学業に関係あるのか！」と、かなりむかついていたのをおぼえています。そんなことで、学校に行くのがだんだんしんどくなっていきました。勉強するのが嫌なだけだろうと言われたりもしましたが、「私の頭はおかしくない」と、腹立たしく悲しく引き裂かれる思いを勉学に向けるようにしていました。もし体が男だったらと強く思ったのは、この頃からかもしれません。高校の時から社会人まで、それでも男性と付き合わなければと思ったことがあり、何人か体の性が男性の人と関係を持ちました。が、女性と関係を

もった時のようなドキドキや興奮、切ない気持ちはなかったです。

大学は、県外に進学しました。全く知らない土地、全く初めての人間関係で、私服で声を出して話すと「なんだやお前、女だったか(や)」と言われ、人と話をすることが怖くなってしまいました。なるべく女性だと思われないよう、だぼっとした服で、小さな胸だけどそれでもバレないようにとだんだん猫背になっていく。高校までは、同性であろうと恋愛はできると思っていたのですが、大学に入ると、その先に将来や結婚の話が出てきて暗い気持ちになります。下着も買いに行きにくい、生理用品も買いに行きにくい。公衆トイレの女性トイレに行くときも申し訳ない気持ちになる（温泉は、裸になるので、場所を間違っていると言われることはなくて、まだ良い方）。散髪もレディースカットとメンズカットに分かれているので、なかなか行きにくい。こんな普通の生活がいちいちちょっとずつしんどい。好きな人とは結婚も出来ない。子どもも持てない。生きている意味が分からない。どうせいつか死ぬのに何を糧に生きていったら良いのか分からない・・・。

結局、大学は辞めました。それからは友だちの家で呑んだくれることが二カ月くらい続き、そんな私を見かねた父親が連れて行ってくれたのは、父の職場でもある特別養護老人ホームでした。介護の仕事で一番良かったのは、男女別の制服がなかったことです。そして利用者の方が、私を男とか女ではなく孫みたいな存在として接してくれたこと。それまで、同じ年代の子と過ごすことが多かった私は、幅広い年代の方に出会えたことで価値観が広がったような気がします。

とはいえ、社会人になると出てくるのは、やっぱり「彼氏は？」「結婚は？」「子どもは何人欲しい？」などの話題。聞かれるたびに、「私は仕事に生きるので結婚はしません」と嘘をつくしかありませんでした。そりゃ、結婚もしたいし、子

どもも欲しいよ。でも、できないし。かと言って、そうした質問をされる人達にいちいち本当のことを説明する気にはなれませんでした。

私は、アルコール依存の“け”があります。子どもの頃、親戚の集まりや自治会の盆踊りの練習の集まりなどで、いつもと違った時間、空間で、酔った大人が楽しそうにしているのを見ていた記憶があること、それからなんと言っても美味しいから、とにかくアルコールが好きなのではないかと思います。仕事をしているときも、呑むためにお金を稼いでいると思っていたことがあります。アルコールが私にとってはガソリンで、元気で過ごせる素なわけです。家にいるときは、ほとんど呑んでいたのではないだろうか。それが、私の居場所になっていたのだと思います。今でもそうだと思います。ただ本当に私は酒癖が悪い。前につきあっていた人に、「呑んでるときなら、何を言っても、何をしても、お酒のせいだから良いと思ってるでしょう」と叱られたことがありました。酒癖が悪いことを自分で免罪符?にしていた気がします。呑んでいる時なら、呑んだせいにして許してもらえる。呑んだ時は、例えばセクハラしても大丈夫って思っている。いやダメでしょ。でも、その時つきあっていた人が言ったとおり頭の中で思っている。アルコールでなくした人間関係はかなりあったと思う。気持ち悪い自分が増えていく。それでもアルコールはやめられない。呑むことへの罪悪感が増えるほど、酔い方も悪くなっていく。

そんな中、私に転機がおとずれます。あるとき、妹に連れられて和太鼓を紹介してもらったのですが、その和太鼓との出会いが私を少しずつ変えてくれたのです。和太鼓は、私に恋愛と仕事以外で自分を表現することを教えてくれたのでした。この頃、妹と一緒に得度もしました。

私は、生きていけると思いました。

しかしそんな矢先、大切な人を失うことがあり、もう何をしても二度と巻き戻せない時間に、ずっと泣きながら過ごしている自分がいました。ぽっかりと空いた穴・・・。あなたがいないことが、私にどれだけ影響を与えたのか。私は、自分が変わることで、あなたの生きた証を残したいと思いました。そうは思っても、何も出来ず、ただただ過ぎていく日々。そんな思いで過ごしていた時、365日公演という演劇に出会います。365日公演とは、一年間、毎日市内のどこかで演劇を上演し、お客さんがゼロになったら終了するというチャレンジで、当初は無謀と言われていたのですが、大雪や様々なピンチを乗り越えて365日連続の演劇が達成され、最終日の大みそかには満席を超える大盛況となりました。私は演劇を観ながら、そして俳優の生き方を観ながら、衝撃を受けて、本当に変わろうと決意、そして行動しました。SNS上でカミングアウトをし、介護の仕事を辞めました。この頃の思いは、雲南市の幸雲南塾に塾生として参加したので、YouTube に残っています。

https://youtu.be/b-gklxvmvpE

仕事を辞めると、給料はなくなりますが、自分の時間がたくさんでき、その時間を使って、色んな人に会いに行ったり、イベントなどに行ったりするようになりました。スティーブジョブズが「もし今日が人生最後の日なら、自分は何をするだろうか？」ということを、毎朝、鏡に映る自分に問いかけていたそうですが、私もそんな感じで過ごしていた気がします。インターネットで「未来の住職塾」というのを見つけて参加したり、LGBTQ の活動をされている清水展人さんを見つけ、SNS でつながって会いに行ったり。

また、仏教には関心がありましたから、インターネットで調べたり、書籍を読み漁ったりして仏教を学びました。

お釈迦さまは、インドの小国の王子として生まれ、生老病死について考えながら、おそらく身分制度にも疑問を持たれたのだと思います。やがて29歳の時にお城を出て身分を捨て、修行をされる中で苦行にも疑問を持ち、菩提樹のもとで悟りをひらかれたそうです。

親鸞聖人は、9 歳の時に出家・得度され、比叡山で修行するも救われることがなく絶望したある日、法然上人に出会われます。おそらく法然上人に、「あなたはあなたのままで良いのです」というようなことを言われたのではないでしょうか。そして修行の道を捨て、結婚もし、非僧非俗の生活を送られました。

私は、ふと気づいたのです。お釈迦さまも親鸞聖人も、社会の現実を憂い、自分の心と向き合い、悩み苦しまれ、たくさんの出会いの中で、真実をよりどころとして生きる道を歩まれたのだと。

親鸞聖人が法然上人に会えたように、私も私のままでいられる仏さまの教えと、たくさんの仲間に巡り会うことができました。

【結びにかえて】

以前、友だちに言われました。「女性として半分、男性として半分で生きてるね、だから法華の年齢は半分だね」と。今、私は 44 歳だから、女性として 22 歳、男性として 22 歳の真ん中らへんの私がいる。表現が難しいですが、真の（?）女性ではないと思っていました。かと言って男性になりたかったわけでもないのです。以前は、性自認と性的指向をひとくくりに考えていたので、女性が好きなら男性にならないといけないと思っていたのです。スカートは苦手だけど、学ランが着たかったわけではありません。一番好きなのは、体操服です。

これが分かっただけでも、生きやすくなりました。ちょっとしたことで人生は変わるものです。

介護の仕事をしていた時、三つ以上の居場所づくりが大切だと教わりました。自分が安心して話したり、表現できたりする場所がないと、人はエネルギーを溜めておけなくなるのだと思います。私は、生まれた時、家族がいて、寺があって、山という自然があって、地域があって、友だちがいました。けれども、長男が家を継ぐという現実に出会った時、家族と寺と地域との縁が切れたような気がしました。ここの家では暮らせないのだと。女性が恋愛対象であることに気づいた時、友だちという縁も切れた気がしました。同性は恋愛対象であり、男性はライバルだと。そんなとき、自分の居場所がなくて孤独を感じると故郷の山へ登っていました。この山だけは、いつも自分を受け入れてくれる。色んな縁が切れた自分にとって、たったひとつの居場所。

やがて、仕事という居場所が出来て、そのうち太鼓や演劇、地元の神楽という文化芸術のご縁が出来て、そのつながりからまた人とのご縁がつながって。つながってくると、また、家族や寺、地域ともご縁ができて。「自分なんて」と思って、勝手に切れてきたと思っていたご縁は実はずっとつながっていたことに気づいたり。三つ以上の居場所づくりが、ずっと私の目標です。今までなかった居場所をつくることは、私の居場所でもあるけど、それはきっと他の誰かの居場所にもなるはずです。

いま、まさに私は、社会的に立場が弱いとされるマイノリティの声をきちんと社会に届け、社会を変えていこうと活動しています。マイノリティが生きやすい社会は、誰もが生きやすい社会になると信じて。もちろん、新たなマイノリティが産まれてきて同じことが繰り返されるかもしれません。私は必ずしも自分が正しいという自信はないけど、自分がそうなりたい社会を目指して、仲間に助

けられながら。

とはいえ、まだまだ酒はやめられず、生きたい消えたいを繰り返し、変えたくない自分と変えたい自分の繰り返し。だけど、何も出来ず、ああすれば良かったこうすれば良かったと絶望し、胸が引き裂かれ、空っぽになる思いだけはもうしたくない。

自分が本当に変わりたいと思ったら、必ず誰かが助けてくれる、自分がどうしたいかしっかりと自分の声を聞いて行動すると、自分のご縁がながれていくのだと思います。自灯明と法灯明。宇宙の法に抱かれ、自分の心を灯とし、天命に安じて人事を尽くしていきたいと思います。

たった一人の想いからでも世界を変えることが出来るかもしれない。
有り難いご縁に感謝

平等覚に帰命せよ―偏った正義をこえて―

釋 優 顯

釋優顯と申します。浄土真宗（真宗大谷派）の僧侶です。熱心な真宗門徒だった父方の曾祖父の影響でこの道に入りました。現在、宗門関係学校で宗教科の非常勤講師をするかたわら、役僧（法務員）をしたり、ファミリーシップ宣誓をしたパートナーとともに自宅アパートを開放して聞法会(法話を聞く会)を行ったりしています。

今回、ご縁を頂戴し本誌に寄稿させていただくことになりました。日本におけるLGBTQ+に関する社会的理解は、徐々にではありますが浸透しつつあるものの、仏教界では大幅におくれをとっています。そのため、各教団やお寺のなかで生きづらさや苦しみを感じている当事者は少なくありません。原因は、おそらくLGBTQ+に対する理解が正確になされていない、もしくは、そもそも関心すらないからでしょう。この現状を解決するためには、まず「正しく知る」こと、そして「対話する」ことが必要不可欠であると私は考えています。拙稿が、少しでも当事者の力となり、各教団や社会の取り組みの進展に向けた一助となることを念じてやみません。

【浄土真宗との出あい】

1996年、私は愛知県で誕生しました。地方部で、しかも本家。待望の長男誕生で、初節句には親戚中が集まり大宴会だったそうです。両親・祖父母は共働きでしたので、子守りはよく曾祖父がしてくれました。曾祖父は大正9年の生まれで、家族には頑固で厳しいけれど私にとっては優しいおじいちゃん。

本当によく可愛がってもらいました。太平洋戦争中は衛生兵として出征したと聞いています。戦争のことは多くを語りませんでしたし、明確な理由も聞いていませんが、おそらくは目の前で数多くの尊い命が失われていく体験をしたこと、妻子を病気で早くに失ったことが曾祖父を聞法の道へと導いたのだと思います。

「帰命無量寿如来」。午前6時、仏間から曾祖父の声が聞こえてきます。わが家の1日は、この曾祖父のお勤めの声で始まるのでした。朝が弱い私は、一緒におあさじ（朝のお勤め）を勤めた記憶が数えるほどしかありませんが、鳴り響くキン（お鈴）の音で目が覚めたことはよく覚えています（苦笑）。炊きたてのご飯でつくったお仏供（仏さまにそなえるご飯）をおそなえし、しばらく新聞を読んで畑仕事へ出かけるのが曾祖父の朝のルーティンでした。畑へ連れて行ってもらい、とれたての野菜を一緒に食べたことが思い出されます。11時頃には帰宅し、かならず、お控えしてきたお仏供を電子レンジで温めて食べていました。「おさがりを食べると仏さんから力をもらえるよ」と言っていたことがとても印象に残っています。お昼からは、お寺へ聞法に出かけるかゲートボールへ。よく同行していました。夕方4時には帰宅をし、相撲中継を視聴して午後6時頃からおゆうじ（晩のお勤め）。ほぼ毎日、一緒にお勤めをしました。忘れもしませんが、おゆうじの際、普段は優しい曾祖父に一度だけ叱られた思い出があります。お勤めの結び、「回向」を読み終わって席を立とうとした時のことです。「まだ終わっとらんぞ、しっかり聞くように」と。曾祖父は『御文』（『御文章』）をことのほか大切にしていました。教えに向き合う姿勢はとても厳しかったです。そんな曾祖父のそばで幼少期を過ごしました。

ちなみに、私のお寺デビューは3歳のときです（笑）。曾祖父に手を引かれてお参りした、お手次寺の報恩講さんでした。当時は明治・大正生まれのおじ

いさんおばあさんがご健在で、お寺へ行くと、「ボク、よく参っておくれたねぇ」と言ってお菓子をくださったことを覚えています。それからというもの、足しげくお寺へお参りするようになりました。当初は、「お菓子がもらえる」「なぜかわからないけど皆さんがよろこんでくれる」という不純な動機でしたが、お参りを続けるうち、子ども心にお荘厳（仏前のおかざり）の美しさやお寺の雰囲気に魅力を感じるようになったのです。

【お坊さんになりたい】

私が小学1年生の頃だったでしょうか。曾祖父が骨肉腫に侵されます。高齢だったこともあり進行は緩やかでしたが、あちこちに転移した腫瘍は曾祖父の身体を蝕んでいきました。とても辛抱強い人でしたので弱音を吐いている姿は見たことがありませんが、ときおり、あまりの激痛に顔を歪めていたことを覚えています。お見舞いに行くと、かならず涙を流しながら「ありがとう、ありがとう」と言って手を握ってくれました。当時は、なんだか気恥ずかしかったのと、あんなに元気だった曾祖父が日に日に弱っていく事実を受け入れられず、その場にいることが辛くて手を握り返すことができませんでした。母に「早く帰ろうよ」と言って、病室を飛び出ていくことも多々。今となっては、どうしてあのとき「ありがとう」と素直に手を握ってあげられなかったのかと、悔やまれてなりません…。

ところで、曾祖父にはこんなエピソードがあります。旅行や入院をする際、曾祖父はかならず六字のお名号が書かれた「三折本尊」を手帳に挟み、お念珠とともに携帯していました。いつでもどこでも手を合わせることができるように、ということであれば同じような方がおられるかもしれません。しかし、曾祖父の場合はちょっとわけが違っていました。よほどのことがない限り、かならず「正

信偈」のお勤めをするのです。旅館であっても病室であっても、自宅のお内仏（お仏壇）の前でしているのとなんら変わりなく、普段通り行っていました。「お勤めしとったら看護師に怒られた」と言っていたこともあります。当時の私には、なぜそこまでするのか理解できませんでしたが、そのとき見せてくれた曾祖父の姿が、今日の私に大きな影響を及ぼしていることは申すまでもありません。

話をもとに返します。小学3年生の2月16日、曾祖父が亡くなりました。ちょうど給食を食べ終わって教室の掃除をしていたとき、母が慌てて教室へやってきたことを記憶しています。「おじいちゃんが亡くなった…」そう聞いた瞬間、頭の中が真っ白になりました。母の運転する車の助手席で、曾祖父と過ごした日々が走馬灯のように浮かんできたことを鮮明に覚えています。現実を受け入れられないまま帰宅し、呆然と曾祖父の帰りを待ちました。

しばらくして、祖父母と共に真っ白な布張りの棺に納められた曾祖父の亡骸が帰ってきました。仏間に安置された棺の小窓から顔を見たとき、（これは蝋人形かなにかではないのか）と本気で思いましたが、1日、2日と経つうちに（あぁ…本当に亡くなったんだな）と実感したのでした。私にとって曾祖父の死は恐怖そのものでしたが、同時に、「いのちとはなにか」「死んだらどうなるのか」「おじいちゃんはなんのために教えを聞いていたのか」という疑問が浮かびました。このとき、（お坊さんになったらなにかがわかるかもしれない、お坊さんになりたい）と思ったのです。

【浄土宗の小僧さん】

曾祖父が亡くなったのちも相変わらずお寺参りを続ける私でしたが、僧侶となるご縁はなかなかありませんでした。冒頭でもふれた通り、私の生まれ育った地域は地方部で、「お寺はその一族が継ぐものだ」というような考え方が

根強く残っている地域です。そのため、次第に「お寺の子」でないと僧侶になることは難しいのではないかと考えるようになっていきました。僧侶になりたいという思いはあるけれど、なかばあきらめていたのです。そうこうしているうちに月日は流れ、気づけば小学5年生になっていました。夏頃に両親が離婚をして母の実家に引っ越したのですが、これが私にとってのターニングポイントとなります。

新しい環境での生活が始まって少し経った頃、母方の曾祖母のお年忌がありました。このとき、私は曾祖父の形見である『仏説阿弥陀経』の折本を持参していたのですが、それに気づいた母方の檀那寺の住職に声をかけられます。「小学生でお経本を持っとる子には今まで出会ったことがない。坊さんになる気はないか。弟子にとりたい。」まさに青天の霹靂でした。思いがけず、僧侶となるご縁が巡ってきたのです。母の実家の宗旨は浄土宗の一派でした。小学生の拙い知識ではありましたが、浄土真宗と浄土宗の違いは理解していました。しかし、（これもなにかのご縁であるし、たしかに宗旨は違うけれど同じ「南無阿弥陀仏」の教えではないか）、（それに親鸞聖人の師匠である法然上人を宗祖としているではないか）ということで、お話をお受けすることにしたのです。これがのちのち自分を苦しめることになることを、この時はまだ知る由もありませんでした。

年忌法要から1年ほど経った2009年1月、小学6年生の私は 1 回目の得度式（僧侶になる儀式）を受式します。念願の僧侶としての生活がスタートしました。純粋に「嬉しい！」と言いたかったのですが、この得度式で早くも1つ目の疑問が浮かんでしまいます。式中の垂示で、法主猊下から「皆さんは戒律を受けて僧侶となられたわけですから、これからは、善いことをする悪いことはしないということを深く心に刻んでください」と言われたのです。なにも間違

ったことは言っていないのですが、これまで浄土真宗の教えを聞いてきた私の頭の中には「？」が並んでいました。（常に完璧でなければならないのだろうか…）と、とても不安になったことを覚えています。

得度から高校へ進学するまでの小僧としての生活は、皆さんがイメージされるような厳しいものではありませんでした。師僧の寺は実家から徒歩5分ほどの距離にありましたので、普段は実家で生活をし、法要やその準備の時などに出かける形をとっていたのです。得度式で疑問を抱いてしまった私でしたが、お寺の仕事は楽しんで取り組んでいました。春秋彼岸とお盆の施餓鬼、檀家さんの家々を巡回する棚経、歴代の祖師方の祥月法要などなど。中学生と二足の草鞋で結構忙しくしていました。しばらくそのような小僧生活を送っていたのですが、中学2年生の終わりごろになって「法脈相承（加行）」を行うことになったのです。

「法脈相承」とは、一人前の僧侶となるために法主猊下から宗派に伝わる奥義を伝授してもらう儀式で、その準備としての「行」があります。一人前といっても、いわば自動車の仮免許のようなもので、法要の導師などができるようになるわけではありませんが、それでも「法脈相承を受けた」と言えば宗派内では一目おかれるようになるのです。紙幅の都合もあるため詳細な説明は省きますが、1日に数回水行をしたり、長時間にわたって読経したり、五体投地の礼拝を数百回行ったりと、その内容はかなりハードなものでした。風呂にも入れません。時には大きな声で怒鳴られることも。底冷えする3月の京都で水をかぶり、防寒対策もされていない場所で薄着かつ裸足で数日間過ごすわけですから、体調不良になる人もいました。しかし、「修行」ですからすべては自己責任で、我慢して続けるか、下山して翌年に一から行うかの判断を迫られます。完全に「自力修行」だと私は思うのですが、行担当の僧侶からは「すべ

ては阿弥陀仏のお力によってさせてもらうことなんだ。阿弥陀仏が私たちにさせてくださっているんだ」と言われました。私の頭の中は「？」だらけでした。同じ「南無阿弥陀仏」でも、宗旨によってここまで受け止め方が異なるのかと強く思ったことを覚えています。なんとか行を終えて奥義を伝授してもらい、意気揚々と帰宅しました。ところが、そこからが苦しみのはじまりでした。

いくら修行を成し遂げたとはいえ、地元へ帰れば一中学生であることに変わりありません。今思えば当然のことですが、修行をしたからといって生活がかわるわけでもなければ取り立てて誰かが褒めてくれるわけでもないわけです。しかし、当時の自分は「苦しい修行を成し遂げた」という自負心が強かったため、そうした自分と、数百人いる同級生の中の一人というギャップにやられてしまい、学校を休みがちになりました。当初は周囲も心配してくれていましたが、理由を話すと、「たかがそんなことで？みんな頑張ってるんだから甘えるな」、「そんなんで坊さんやっていけるの？」と散々言われ、ついに不登校になってしまったのでした。中学3年の頃の内申点は全く記憶にありませんが、オール１に近い状態だったと思います。当然のことながら進路は限られていました。選択を迫られたときのことです。師僧から「心機一転、総本山に住み込みで入って京都の高校へ通ってはどうか」という提案がありました。（不登校で、内申点もほぼない自分が合格などできないだろう）となかばあきらめていましたが、受験の結果はなんと合格。京都での生活がはじまります。京都での生活は、辛い思いもしましたが私の人生を大きく変えるきっかけとなりました。

【ハラスメント】

ここでやっと（笑）、セクシュアリティについてのお話をしたいと思います。私のセクシュアリティはゲイです。自分がゲイであると気づいたのは小学生の頃

で、きっかけは小学校の先輩でした。バスケットボールをしている姿を見てドキッとし、（かっこいいな）と思ったのです。 ただ、これまでにも述べた通り、地元の環境的に自分がゲイであるということはとても言い出せる雰囲気ではありませんでした。「男性は女性と付き合うもの」「結婚して跡継ぎが生まれたら一人前」というあり方が当たり前のコミュニティのなかで、「自分は男性が好き」なんて言ったら絶対に軽蔑されると思い、必死に隠していたことを覚えています。実際問題、小学校の同級生だったオープンリーゲイの子は、他の同級生たちから「きもーい」「あっちいけよ、さわるなよ」と侮蔑の言葉を投げつけられていました。そんな環境下で生きていましたので、当時は自分がおかしいと思っていましたし、なんとかして女性を好きにならなければならないと思っていたのです。病気かもしれないとさえ思っていました。ですから、自分なりにあれこれ努力してみましたが、やはり先輩には目が行ってしまうし、遠足で同級生の男子に手を繋がれたらドキドキしてしまうし、どうすることもできないのでした。目に見えない牢獄のなかで、必死にもがき続けながら幼少期を過ごしました。

自分がゲイであることを周囲に隠し続けて8年が経った頃、京都の総本山での新生活がはじまりました。（やっと地元を離れることができる）（大好きな京都で生活ができる）と、ワクワクしながら引っ越しをした記憶があります。起床したらまずは鐘撞き、その後40分ほどの勤行をして登校です。友だちもでき、部活動にも入部して、とても楽しい学校生活でした。総本山へ帰ってからは事務仕事や掃除などをし、1日が終わってゆきます。しばらくはとても充実した生活を送っていたのですが、ある日事件が勃発しました。上司からパワハラを受けたのです。その日を境に、ハラスメントはどんどんエスカレートし、パワハラにとどまらずセクハラやSOGIハラもたびたび受けました。よくある話ですが、

一番厄介だったことは本人に悪意がなかったことです。前時代的な思考の方が多い環境だったため、違和を感じなかったのでしょう。反抗すれば火に油を注ぐようなことになると思い、なにもできませんでした。しかし、あまりにも続くハラスメントに我慢の限界を迎えた私は、思い切って管理職に相談をすることにしました。

「とりあえず注意しておくね」。勇気を振り絞って相談した私に、管理職から言われたのはその一言でした。唖然としたことを覚えています。具体的な対策は何も示されず、不信感しかありませんでした。私は咄嗟に、「この宗派には、僧侶の行動規範である戒律がありますよね？ 得度の時も加行の時もご法主から戒律を授けられました」と管理職に投げかけました。今思うとかなりズレた質問なのですが、高校生なりの精一杯の反抗だったのです。これに対して、「戒律は破るためにある。破ってしまうからお念仏があるんだ」と返答がありました。（そうであるとすれば、戒律なんて必要あるのだろうか…）と思いましたし、なによりもハラスメントを正当化された気がしてとても不快な気持ちでした。その後も数回相談をしましたが対応は変わらず、宗派・総本山に対する不満は日に日につのり、その頃から私の心は浄土真宗へと向かうようになります。（やはり自分には親鸞聖人の教えしかない）と強く思ったのです。学校からまっすぐ総本山へ帰ることは少なくなり、上司が帰宅する時間まで東西本願寺の御堂で過ごしたり、折をみて聞法会に参加したりするようになります。

総本山での辛い日々は続き、気づけば季節は翌年の春になっていました。相変わらずハラスメントは続いており、改善されるどころか他の職員までもが行うようになっていたのでした。挨拶をしても無視されたり、部活動に参加しようとすれば「わがままな行動ばかりしてもらっては困る」ときつく言われたり。心配して声をかけてくれる人は誰もおらず、地獄のような日々だったことを覚

えています。(もうこんなところにいたくない…)そう思った私は、覚悟を決め、総本山を出て実家に帰ることにしました。もう戻ってくるつもりもなかったため、玄関の鍵を部屋の机上に置き、総本山を後にしたのでした。

実家に帰ってからは穏やかな生活を送ることができました。春休み中だったため、幼馴染と食事に行ったり、自分のために時間を割くことができ本当に幸せでした。しかし、それも束の間、師僧から「どういうつもりだ。早く本山へ戻れ」と連絡が入ったのです。たしかに、何の連絡もなしに飛び出してしまったことは私に非があったため謝罪をし、事情をお伝えしました。しかし、その直後に言われたのが「みんなと仲良くせにゃいかん。きちんと謝罪して頼れば助けてくれるはずだ。なんでもいいからとりあえず本山に戻れ」という言葉でした。もう駄目だと思いました。(もうこの宗派には誰も味方がいない。本気で宗旨を替えよう)そう心に決めたのです。

その後、私自身としては戻る気がありませんでしたが、無理やり総本山へ連れ戻され、同じように飛び出すということを2回繰り返しました。総本山へ戻ると、部屋の机上にはかならず「自身の行動を深く反省し、自分を俯瞰できるようになってから戻ってきてください」と書かれた置手紙が、ただ1枚置かれていたのでした。そして、3回目の下山。精神的に疲弊しきっていた私ですが、その後の身の振り方を考えなければならなかったため、(これが三度目の正直だ)と思い総本山を出たのです。門扉を閉めて鍵を塀の中に放り込み、飛び出すように総本山を後にしたのでした。

【宗旨替えとカミングアウト】

3 回目の下山のときは早朝から動きだしたのですが、京都駅へ向かう途中、はたと思い立ち御本山(真宗本廟)のおあさじにお参りしました。「帰命無量寿

如来」。御影堂で「正信偈」の調声を耳にしたとき、（あぁ、これだ…）と身震いした記憶があります。お勤めが済み、ご法話を聞き終わって駅へ向かおうとしていたところ、聞法会で知り合った法姉とばったり出くわしました。「今日ご法話をなさった先生と引き合わせたいです。ぜひお話してみてください」と言われ、急遽、講師の先生とお会いすることになったのです。この時の出遇いがきっかけとなり、今日私は浄土真宗の僧侶として歩んでいます。先生とは、これまでの経緯や浄土真宗の僧侶になりたいことなど、いろいろとお話をしました。「『仏説無量寿経』に「随意所願　皆可得度」というお言葉があります。今のお心を大切に、ぜひ得度なさってください。応援します」という先生の言葉に、とても励まされたことを覚えています。

まっすぐ実家に向かう予定が思いがけないことになりましたが、本当にありがたい出遇いをいただきました。

さて、実家に帰ってからは、京都の高校の退学手続きや愛知の高校への転入試験などで目まぐるしく日々が過ぎ去っていきました。学校のことは、先生方が骨を折ってくださったおかげでスムーズに進みましたが、大変だったのは「還俗」（一般人に戻る）の手続きでした。今日、日本仏教のほとんどの教団では「二重僧籍」が禁止されています。あちらこちらの宗派で僧籍を持っていたら、どの宗派の僧侶かよくわからなくなりますし、教えに生きる者としての筋が通らなくなりますよね。そのため、僧籍は1つというのが基本です。私の場合、浄土真宗で得度すると二重僧籍になってしまうため、浄土宗の僧籍を削除して一度還俗し、改めて浄土真宗で得度を受けなおす必要がありました。ところが、どれだけ連絡しても師僧は会ってくださらず、「還俗願」を提出してもなかなか受理していただけなかったのです。正直こちらの都合ですし、いろいろ考えや思いがおありだったと思いますから気持ちはわかるのですが、本当に時

間がかかりました。結局、こちらの話は一切聞いてくださらず、電話口で一方的に怒鳴られたのが最後でした。その後、なんとか還俗できた私は、曾祖父とともにお参りしていたお手次寺の衆徒として、2014年11月に真宗大谷派で得度式を受式、仏弟子「釋優顯」として新たなスタートを切ったのです。

ちょうどその頃、吹っ切れた私はゲイとしての活動を始めました。最初はスマホでいろいろ調べた記憶があります。そこには、めくるめく未知の世界が広がっていました（笑）。これまで自分がおかしいと思っていたことはなにもおかしいことではなく、病気でもないことがはっきりしてとても嬉しかったですし、（無理に女性を好きにならなくてもいいんだ）と、ホッとしたことを覚えています。「ゲイ友を探すならアプリがおすすめ」となにかのサイトに書いてあったため登録し、そこから徐々にコミュニティが広がっていきました。同じセクシュアリティの同世代の子と電話したり、実際に会って話したりするなかで、それぞれの抱えている悩みなどを共有できたことが、今の私にとって大きな糧になっています。（苦しいのは自分だけではないのだな）と、とても安心しました。ただ、アプリは場合によって危険が伴うこともありますので十分注意してください…（苦笑）。

その後、しばらくしてはじめての彼氏ができたのですが、それを機に家族にカミングアウトしました。正直、ものすごく勇気のいる決断でした。（見放されたらどうしよう）（嫌われたらどうしよう）と、かなり悩みましたが、私の場合、カミングアウトしてよかったと思っています。驚いたのは祖母の反応でした。「わかってたよ。あなたが幸せならそれでいいじゃない」と言ってくれたのです。家族のなかで、世代的に一番拒絶されると思っていた祖母からの思いがけない一言に、本当に救われました。それと同時に、（気づかれていたのか）となんだか照れくさくもなり、気づいていたのになにも言わずにいてくれた祖母の優しさ

に心が温かくなったのでした。他の家族はというと、今までまったく気づいていなかったようで、最初はみんな驚き動揺していましたが、対話を重ねていくなかで受容してくれました。カミングアウトしたことで家族関係がものすごく悪くなってしまった友人の話を聞いていたので、私は本当に恵まれているのだと強く感じたことを覚えています。その後、信頼をおける保育園からの幼馴染や友人知人にもカミングアウトしましたが、誰一人として私を拒否することなく受容してくれました。ただし、カミングアウトは本当にタイミングと相手次第なところがあると思います。とても悲しいことですが、受け容れてもらえない可能性も十分あり得ます。ですから、カミングアウトする場合、なかなか難しいことではありますが、自分のおかれた状況をきちんと見極めることが重要だと私は思っています。無理なカミングアウトは、自分にとっても相手にとってもデメリットしかありません。そして、やはり「対話」は必要不可欠です。まずは対話を交わし、セクシュアルマイノリティの正しい知識や、自分自身のことを知ってもらうことからはじめるしかないのかなと思っています。

【2つのマイノリティ】

さて、これまでいろいろと申し上げてきましたが（ほぼ私の半生を書き連ねただけですが…）、結びに「お寺とマイノリティ」についてお話ししたいと思います。

浄土真宗の僧侶となり、違和感なく納得いく形で教えと向き合うことができるようになった私ですが、今日の教団のあり方、お寺に対する世間の見方に生きづらさを感じています。「在家なのに〇〇」、「あなた、お寺の生まれでもないのにお坊さんになったの？　奇特だねぇ。どこかのお寺の娘さんと結婚するといいねぇ」。これまで幾度となく言われてきた言葉です。決して相手に悪意が

あるわけではないと思うのですが、これを聞くたび、毎度胸が締め付けられます。これは日本仏教界全体が抱える問題ではないでしょうか。往時の「家制度」を引きずっているのです。そうしたあり方は、もちろんデメリットばかりでなくメリットもあるとは思うのですが、それでも私にとっては悩みの種となっています。正直、住職になりたいという思いは今もありますが、「在家出身」「セクシュアルマイノリティ」という、「2つのマイノリティ」が足枷となっているのです。私が自宅を開放して聞法道場にしている理由の１つでもあります。（住職をするのであればパートナーと一緒に入寺したいけれど現状は難しい。それなら新しい形を作り出してしまえばいいんじゃないか）、そう思ったのがきっかけです。まだまだ課題はたくさんありますが、今後さらに活動の輪を広げていきたいと考えています。

浄土真宗の宗祖 親鸞聖人制作の『浄土和讃』に、

解脱の光輪きはもなし
光触かふるものはみな
有無をはなるとのべたまふ
平等覚に帰命せよ

（阿弥陀如来のすくいの光には限りがありません。その光のはたらきを身に受けた者はみな、偏った捉え方を離れるといいます。無差別平等をさとった阿弥陀如来を依り所として歩んでいきなさい）

という一首があります。仏教の説く平等は、人間の眼ではなく仏(真理)から見た平等です。人間は、気づかぬうちに自他を分け隔て優劣をつけて差別す

る心を持っています。しかし、仏の眼から見たとき、人間には何の差別もなく、すべてのいのちが尊く光り輝いているのです。自分自身の捉え方を絶対化するのではなく、「仏さまはどのようにご覧になるのか」という立場から考えてみることが大切ではないかと思います。

「神主さん」たちのライフストーリー、あるいは門とノイズの話

楽丸　こぼね

初めまして、神道 LGBTQ+連絡会の楽丸と申します。今回、『お坊さんたちのライフストーリー』というお題でこの場へお招き頂きました。

仏教ではなく神道の者である、お坊さんではなく神主さんである身で他の皆様に混ざってお話しさせて頂くことは、光栄でもあり恐縮でもあり不安でもあり、色々な意味で心臓がギュッと縮まる思いです。お見苦しい点は何卒ご容赦頂けましたら幸いです。

さて、今回のお題に使われている「ライフストーリー」、実はそんなに馴染みがない言葉だったもので、ひとまず辞書を引いてみたところ、「口承の形で語られる人生譚」とありました。

私の人生が語るほどのものかという点はさて置いて、まず、こちらをお読みの皆さんは、「神主さんの人生」というと、一体どんなものを想像されるでしょうか？ これは単なる勘ですが、多分あまりイメージの湧かない、馴染みのないものではないかと思います（私にとっての「ライフストーリー」の語以上に）。
もしかしたら、「神主さん」って何？ という方もおられるかもしれません。なので、そもそも神主とは何か、ということからお話ししてみます。

神主とは、神道において神様に奉仕し、神事や祭儀を行う者のうち、主導的立場にある者などを、ざっくりと指す言葉です。「神主＝神社」というイメージが

強いですが、実は神社にいない神主さんもいたりします。

その神主の中でも特に、神社神道（神社神道でない神道もあります）の包括団体のひとつである『神社本庁』から資格を付与され、神社本庁傘下の神社に奉職し、一定の位以上にある者については、「神職」と呼ばれています。

ちなみに、ひょっとすると神主よりも馴染みがあるかもしれない「巫女さん」については、定義を簡潔に説明するのがものすごく難しいです。よくある認識は「補助的な業務を行う若い女性職員」ですが、女性の神主もおりますし、現状「女性」以外の性自認を持つ方も巫女として奉仕されています。必ずしも補助的立場にあるわけでもありませんし、若さを求める必要もなかろうと思います。かろうじて（神社神道では）基本的に資格制度がない、ということは言えるかもしれませんが、神職資格を持つ巫女さんもいらっしゃるので、やはり難しいですね。

私のいる神道 LGBTQ+連絡会は、神職さんもいれば、神職でない神主さんや巫女さんも、またそれ以外の方も在籍しております。
皆それぞれに唯一無二の人生を歩んで来られた方ばかりですが、私や彼らの生についてお話しするその前に、もう少し「神主さん」の解像度を上げるため、先に「よくある神主さんの人生」ないし「神職として奨励されるロールモデル」というものについて、考えてみたいと思います。

まず、「神主さん」というと、ほとんどの方は、シス男性（シスジェンダー男性＝生まれた時の戸籍上の性別と性自認が一致している男性）の神主を思い浮かべるのではと思います（実際には、神主のうち一割強から三割以上はシス男性以外の者なのですが）。

そして次に、神主さんといえば世襲制だろう、両親もそのまた両親も、先祖代々神社関係者なのだろうというイメージをお持ちの方も、きっと多くいらっしゃると思います（余談ですが、そういった神社のおうち出身の方を界隈では「社家」と呼んだりします）。

神社のおうちに生まれ、子どもの頃から家族のお手伝いなどの中で神道に触れ、神職資格を取るために大学や養成機関に進学。そして卒業し資格を取得した後は、大きな神社などへ奉職して上級資格へのステップアップを目指す。その途中のどこかで、同じく神社関係者の「異性」とご縁を結び、奉務先の神社かおうちの神社で結婚式を挙げて家庭を持ち、子どもを産み育てる。ゆくゆくは跡取りとしておうちの神社へ帰り、地域活動などにも関わり社会貢献しながら神社を護持し、神明に奉仕する日々を送る――というのが、神主（特に神職）さんの、（多分）よくある、そして理想的なロールモデルのひとつではないでしょうか。

……神職の知人友人に見せたら、「こんなやつ、あんまりいないよ。それにこの通りになっても、そんなにいいもんじゃないし。ウチなんかお金もないし、子どもはワガママだし、町内会長は中学の先輩でいまだに威張ってくるし....」などと、愚痴大会に発展しそうです。

現在、神社本庁に属する神職さんは 21,330 人、それ以外の神道系の団体にいらっしゃる神主さんを合わせると 57,709 人（くらい）、ということになっています（『宗教年鑑令和４年版』より）。実際にはこのほかに、様々な事情で公的にはカウントされていないけれど、実態としては神主さん、という方も多くおられましょう（また、カウントされているけれど「神主さん」ではないな～とい

う方もいらっしゃることでしょう）。

　では実際、そういった全ての「神主さん」の中で、どれだけの方が、この「理想的」かつ「そんなにいいもんじゃない」ロールモデルにチャレンジできるのでしょうか。

　まず、「資格を取るために大学や養成機関に進学」という段階で、様々なハードルが発生します。

　進学できるだけの経済力があるか？ 身体的・精神的なバリアがないか？ 周囲が進学に理解があるか？ 勉強時間を確保できる環境があるか？ 地方からであれば、余分に掛かる費用や時間、体力をどう捻出するか？

　こういった、学校へ通う際に発生するオーソドックスなハードルももちろんありますし、そのほかに、「進学する場所が、公に学校として認可されているか」なども問題もあります。認可を受けた学校や養成機関以外で資格を取得する場合、税制上の措置や公的な支援・サービスが受けられなかったり、神社界以外で学歴/経歴として認められないなどのケースが出てくる恐れがあるのです。

　もちろん、そのリスクやコストを背負ったとしてもその学校や養成機関に進学したい、と思うからこそ目指すわけですが、リスクもコストもないならばそれに越したことはないですし、希望した側に余裕がなければ、背負いきれなかったものによって、行きたい道が塞がれてしまうかもしれません。

　また、「社家の子」であるか、どこかの神社の紹介がなければそもそも願書さえも受け付けない、というシステムを採用している学校や養成機関も多くあります。まず伝手を探すところから…となると、神主さんになるハードルはぐっ

と高くなりますね（なおこの紹介制度、辞める際のハードルもぐぐっと高くなるのが困りものです）。

　そして、それ以前のハードルも、無数に乱立しています。
たとえば、性別がシス男性でなければ？ 病や障害があれば？ 年齢が、周囲よりも高ければ？ 他の兄弟のほうが優先されてしまえば？ ルーツ、門地が違えば？ 言語が違えば？ 国籍が日本でなければ？ 家族の病気は、職業は、犯罪歴は、そもそも家族がいなければ？ 災害、事故、疫病、虐待、犯罪、戦争、その他諸々の被害を受けてしまったら――それから、それから。

「（進学という）コストを掛ける必要はない」と周囲に判断されて乱暴に切り捨てられてしまう、目の前で「ふつう」の扉を閉じられるその横暴で危険なタイミングは、生まれた瞬間から、もしかしたら生まれる前から、絶えず発生し続けます。
　先述のロールモデルが、ありふれていて何でもないような初めの第一歩目からいかに狭き門であったか、ご理解頂けたでしょうか？
そして貴方は、いくつの門を通り抜けてきたでしょうか。そのことについて、「自分はラッキーでよかったな」と思われたでしょうか。それとも、「これぐらいフツーだよ」と思われたでしょうか。

　いずれにせよ、その無数にある門のひとつでも通れたのならば、我々はその通れた門の数だけ「ラッキー」であり「フツー」です。
　そして、この社会は基本的に、「ラッキーであり、フツーであるマジョリティ」のためにデザインされています。今日もマジョリティのためにマイノリティを排

除し続けているその門は、通れる者にとってはほとんどの場合、門であるとすら認識されません。

前置きが長くなりましたが、そろそろ本題であるところの「私の話」、どんな門を通りどんな門に阻まれてきたかの話に移ります。

私の性はノンバイナリー、つまり「男性/女性」といった、バイナリーなラベルで表せない性自認を持っています。ここで既に、先ほどの「神主さんとして奨励される人生=シス男性であること」から外れることになりますね。
また、ヘテロセクシャル/ヘテロロマンティックでもありません。自分の性的指向/恋愛指向については、長年探してはいるものの、まだしっくりくるラベルに出会っていません。
ラベルがあると、他者への説明の際には何かと便利ですが、（ラッキーなことに）なくてもなんとかなっているので、今のところあまり気にしていません。
ただ、ラベルを貼る貼らないに関わらず、ヘテロセクシャル/ヘテロロマンティックでないことで、現行の婚姻制度の利用や、子どもを育てる選択、あるいはそれに関連する制度の利用は非常に制限されます。

自分がシスジェンダーでもヘテロセクシャル/ヘテロロマンティックでもないと気付いたのがいつだったかは、正確には思い出せません。
幼稚園の頃に（多分）同性の友だちに「大きくなったら結婚しようね」と言われた時だったかも知れませんし、小学校低学年頃に同性カップルを描いた本を立ち読みして、「異性カップルの話より、こっちの方がしっくりくるな」と思った時かも知れません。

同じく小学校の低学年頃、家族や周囲の大人たちからのバイナリーな表現や性規範の押し付けに、猛烈に反発し始めた時だったかも知れません（話が逸れますが、いわゆる性教育の「寝た子を起こすな」論、全く寝ていない子どもがいる時点で無理があると思います）。

ですが実はその頃は、今も続く持病が発症したり、学校で同級生から攻撃対象になったり、親との関係が良くなかったり（大変マイルドな表現をしています）と、比喩でなく生き延びることで必死だったからか、正直なところ、あまり真剣に自分の SOGI（性的指向と性自認）について思い悩んだ記憶がありません。
無意識のうちに SOGI についての差別意識を内面化してしまい、「喫緊の問題でない」と感じて考えまいとしていたのかも知れません（本当は優先順位などないのですが）。

私がようやく自分の SOGI と向き合おうと思えたのは、家を出て（正確には追い出されて）、同じような友だち数人とルームシェアを始めた十代後半の頃のことでした。
明日の米代に事欠く貧乏暮らしだったので、相変わらず生きるのには必死でしたが、誰かから攻撃されないスペースと時間を得られたこと、また、掛け持ちしたアルバイトの合間に休憩していたカフェの常連客に偶々シスヘテロでない（ことをオープンにしている）方が多く、交流の中で世界が広がったことで、やっと己をじっくり客観視できるようになったのだと思います。

そこからご縁があって本格的に「神主さん」への道を歩み始めた頃には、既

に「（少なくとも）自分はシスヘテロではない」と認識していました。

　さて、こうして養育環境や過去の問題などを語ると、「このひとは〇〇だったから、〇〇になってしまったんだ」という乱暴な結びつけ、勝手な憶測をされることが多々あります。なので、このあたりで少し注意書きを入れさせて下さい。

　加害者が攻撃対象を「選んだ」理由を、「被害者を〇〇とみなしたからだ」と論じることと、加害者が攻撃「した」理由を、「被害者が〇〇だったからだ」と紐づけることは、根本から全く別のものです。
　前者は加害が起きる構造について指摘していますが、後者は「よくない（とされている）もの」と「マイノリティ要素」を紐付けて、ステレオタイプを上塗りし、マイノリティ要素自体を攻撃する言葉です。混同されやすいので、ぜひ覚えておいて頂ければと思います。

　差別の原因は、差別を受けた側にはありません。差別を行っている者と、差別を生み出すこの社会に原因があり、行っている側が改善するべきものです。マイノリティであることは悪ではありません。

　さて、マイノリティというと、LGBTQ+や犯罪被害のほうがクローズアップされがちですが、本邦においては、「特定の信仰を持っている」という信仰のあり方、要するにお坊さんや神主さんであることも、実はマイノリティ要素のひとつです。世界人権宣言では、人種や性、門地などとともに「宗教」を理由とする差別を明確に禁じています。

「宗教に関する差別は感じたことがない」と思われる方もいらっしゃるかもしれません。ですが、それはもしかしたら、「差別がない」のではなく、「他の特権によって守られているお陰で感じにくい」というだけかもしれません。
差別による攻撃は同じ要素を持っているもの全員に等しく向けられるのではなく、その他のマジョリティ要素や特権によって守られない、より厳しい立場にある者へとより集中的に向かっていきます。

今の自分にはなんでもないことでも、もっと余裕のない誰かには致命傷になりうる、ということを忘れないで頂きたいと思います。自分に平気なことは他の者にも平気であるはず、と思うべきではありませんし、こと差別問題に関しては、その影響範囲は非常に広く、把握は困難です。

先ほどの言説の〇〇内にも、「LGBTQ+だったから虐待された/いじめられた」「いじめや虐待のショックから LGBTQ+になった」という、LGBTQ+といじめ/虐待のセットと並んで、「信仰を持つ親は虐待をする」「虐待されたから宗教にすがった」「LGBTQ+だったことで孤独を抱え宗教に走った」「宗教に関わった悪影響で LGBTQ+になった」などという、宗教を問題の原因や悪い結果として扱う言説が入ることがしばしばあります。

マイノリティ要素はヘイトとスティグマを接着剤に、使う者の都合で好き勝手に組み合わせられ続け、そのバリエーションには限りがありません。
ですが、どれもこれもただの偏見であり、「被害者に悪いところがある＝悪くない自分には関係ない問題である」としてマジョリティが問題を自分から切り離し、安心するための見方です。

これらをいくら論じても、暴力や貧困、性差別や子どもの権利など、本来向

き合うべき問題が解決されることはありません。目を向けるべき場所を見誤らせ、根本的な原因から遠ざかるだけです。

かなり話が逸れましたが、そろそろまた本題のライフストーリーに戻りましょう。

とはいえ、「自分がシスヘテロでないと自覚し、神主さんを目指した」あとの人生についても、語ることはそんなに多くありません。何らかの輝かしい経歴や爽快な逆転劇があれば見栄えもするのですが、そういったものもほぼないので残念です。

なので引き続き、あちこちで遭遇した門の話へ逸れながら書いていきます。

私が貧困の中でなんとかお金を貯めて、ルームシェアを解消し、神職資格を取るため学校へ入学したのは、同じ年に入学した同期たちよりも年齢が少し上になってからのことでした。

在学中は、窮乏生活の上に実習や労働が重なり心身の調子を崩したり（また話が逸れますが、全ての学校は無償化すべきです）、性暴力被害に遭って相手を告発したり（性被害は若年シス女性だけでなく、性別や年齢、また外見的な要素などを問わず、誰にでも起こりうるものです）、その余波で下宿先を追い出され、しばらくホームレス状態になったり（生活保護申請における扶養照会は早急に無くすべきと思います）と、先のロールモデルとの共通項を探すのが難しいような生活をしていました。

幸運にも安全な寝床を取り戻した後は、しばらく神社界から離れて一般企業をあちこち渡り歩いたり、その中で身体をさらに壊したり、一念発起して 47 都道府県を回り、様々な神社を参拝してみたりもしました。

その後神社界に戻ってまた「神主さん」を始めたり、親と絶縁したり（福祉の最小単位は家でなく個人であるべきと思います）、大変ラッキーなことに学校時代の恩師に拾ってもらって指導を受けたり、そして今は、様々な差別に憤って声を上げていたら、こうして「文を書かないか」とお声を掛けて頂いたり、という日々を送っております。

SOGI あるいは LGBTQ+に関係ある部分でいえば、今も（ありがたくも良好な）関係の続く、戸籍上同性のパートナーと縁付いたり、パートナーと準婚姻関係契約書の公正証書を作ってみたり（性別を限定しない婚姻、いわゆる同性婚に反対する文脈で「公正証書があれば同性婚はいらない」などという者もありますが、正直ほぼ効力はありませんし、まず自分が公正証書のみに切り替えてから言え、と思います）、より安定した関係性を求めて、パートナーシップのあり方をオープンリレーションシップに変更してみたり（こと本邦に限っても、婚姻の形態というものは非常に多様でありました。各々のニーズに合わせた契約ができるべきだと思います）、といったこともありました。

思い返してみれば、ずいぶんと恵まれた人生だった、と思います。ホームレス状態で一番困っていた時に助けてくれたのは、LGBTQ+繋がりで知り合った友人知人でした。親との絶縁を後押ししてくれたのは、パートナーとパートナーのご両親の存在でした。そのほかにも様々な方の助けがなければ、私がここにいることはなかったでしょう。

そして、私はたまたま今まで幸運でしたが、たまたま幸運でなかったせいで大変な思いをされている方も、命を奪われた方も、とてもとてもたくさんいらっしゃいます。

暑さの厳しい季節になると、夏風邪が流行り何日も高熱が出ているのに炎天下の公園で寝ているしかなかった、何人もの高齢の無宿者の方々を思い出します。雪が降ると、「どんなに困ってもこれだけは手放さない」と言いながらドライヤーの温風で暖を取っていた、元美容師の知人を思い出します。

神社界の（役職の）えらい人のところへ乗り込んで、神社で同性の神前結婚式を行わせてくれ、（所謂）同性婚実現のためのアクションをさせてくれ、と求めたこともありました。

その当時（数十年前です）は鼻で笑われただけでしたが、2022 年から 2023 年にかけて神道 LGBTQ+連絡会として行った様々な活動や、同時期にアクションを起こして下さったたくさんの方々のお陰で、神社本庁から「神道の考えには、同性婚を肯定するものも否定するものもない」「同性の神前結婚式の受け入れの可否については各神社に判断を委ねる」との姿勢が表明されたこと、また LGBTQ+に差別的な内容の冊子を発行した神道政治連盟から、「神道において性的マイノリティと言われる方々の存在を否定する考え方はない」「性的少数者に対する差別はあってはならない」と報道各社への公式な回答が得られたことは、ささやかながら大きな一歩であったと思っています。

まだまだ神社界内の LGBTQ+への抑圧や排除は根強いですが、そんな中で少しずつ、性別を問わない神前結婚式を行っている神社も増えてきています。

とはいえ、差別が無くなった、少なくとも改善されつつある、というような楽観視は、依然として全くできない状況です。

バックラッシュは、今後さらに激化していくでしょう。LGBTQ+を排斥したいという欲求を持った者たちの攻撃対象は、彼らにとって攻撃しにくい「同性愛者」という大きな括りから、もっと攻撃しやすいトランスジェンダーや、さらにマイノリティ性が高くスティグマの多い要素へとシフトしていっています。

こうした時、攻撃から身を守るために「ゲイはいいけれど、バイセクシャルはだめ」「レズビアンはいいけれど、トランスジェンダーはだめ」「ポリアモリーは」「（いわゆる広義の）Paraphilia は」などと、範囲を限定し存在をジャッジする言説もよく聞かれます。

また、「こういう差別言説を支持する奴なんか、大体〇〇だ」などと、反論の中で他の軸に対しての差別感情を表出させてしまう者も、しばしば目にします。

ある差別の軸ではマイノリティであっても、別の軸ではマジョリティであることがあります。また、マイノリティ性がいくつも重なることで、より困難な立場に立たされることもあります。これを『交差性』と言います（先ほどの宗教とLGBTQ+のセットのように）。

特定の差別に反対しながら、他の差別には加担するのは、単にマジョリティ特権の適用範囲拡大を求めているだけで、差別の解消でも人権の実現でもありません。この社会に暮らすすべての者に等しく保障されなければ、人権とは呼べません。

人権の実現のためには、あらゆる差別に抵抗しなければなりません。そのためには様々な立場からものを考える必要があります。そして同時に、どれほど努力しても、想像力だけでは限界があるのだということも、知っておく必要

があると思います。

「わかっている」気になっている時が一番危うい、というのはどんな分野であれ言えることですが、様々な学問や技術よりも、私たちは隣にいる他者に対して、驚くほど簡単に「わかっている」と思ってしまうのかもしれません。

これは人生譚というにはあまりに最近の話なのですが、つい先日、突発性難聴になりました。

なるべく早く病院へ向かった方がよいとのことだったので、出張中の慣れない街で目についた耳鼻科へと飛び込んだのですが、そこでの意思疎通は、私が予想していたよりもはるかに困難なものでした。

こちらの耳の調子がいつもと違うので、とにかくお医者さんの話しがうまく聴き取れない。何度か言い直してもらっても分からない。筆談を申し出たものの、筆記用具が咄嗟に出てこない。なんとか用意して書いてもらうと、癖のある字で解読に時間がかかる。スマホに打ち込んで入力してもらうのはお医者さん側が慣れておらず、マイク入力もうまくいかない。

結局、あれこれよく分からないまま諦めて診察を終え、これまたよく分からないままに院内処方のお薬を頂いて帰宅したのですが、「専門医であるはずの耳鼻科でもこれほど困るのなら、日常生活はもっと大変だ」と愕然としました。

「年齢や障害の有無等に関係なく、誰でも必要とする情報に簡単にたどり着け、利用できること」を情報保障と言います（『ハートシティ東京』より）。
この情報保障については、これまでも自分なりに、なるべく学び考えてきたつもりでした。しかしいつの間にか、「世の中の情報保障は段々と改善されてき

ている。少なくとも耳鼻科の病院などでは、最低限の備えくらいはされているに違いない」と、無意識に呑気に楽観的に考えていたことにようやく気付いたのです。

私が考えていた以上に世の中の情報保障は整備されていないし、たとえどこかで改善していたとしても、「今、ここで」困っている当事者がそれを利用できないのならば、どこか遠くの場所の改善は、その時のその当事者にとって、なんの助けにもならない。そして、そのたった一回が命取りになることがある。それらを分かっているつもりで分かっていなかった、自分の認識の甘さを痛感しているところです。

もしこれで、視力や歩行の障害、その他諸々のマイノリティ要素がさらに重なっていたとしたら、交差性によって、その困難はさらに高まっていたことでしょう。現に、その状態で診察券の性別欄にまで言及する余力もその時の私にはありませんでしたし、抗生物質にアレルギーがあることがきちんと相手に伝わっていたかどうかも、正直分かりません。

この社会に暮らす者全てが、その生を保障され、不当に制限される(＝奪われる)ことなく各々の能力を発揮できるように、社会に対して要求できる権利を、我々は人権と呼んできました(人間以外にもその権利はあるので、今後は別の呼び方も模索されるべきでしょう)。

人権は、この社会に生きる者全ての土台です。人権を侵害するものがあるとき、我々は権利の主体として、人権実現のために抗議しなくてはなりません。

しかしその抗議は、ほとんどの場合、現状に不満を抱いていない、抱く必要

がそもそもない「門の存在に気付いていないマジョリティ」には、きっと周波数の合わないラジオのように、ただ耳に痛い雑音や騒音として認識されることでしょう。

義務の不履行を批判し、改善が為されるよう社会に働き掛けている者に対し、平和を乱す悪かのように扱い、「我慢しろ」と抑圧してくる者もいるかもしれません。（こちらは今現在困っていて、もう我慢できないから抗議しているのに？ 彼らの秩序は、こちらの権利を侵害しているお陰で保たれているのに？）

ここで、「でも大丈夫」「いつかうまくいく」と、希望に満ちた未来を語れたならば良かったのですが、残念ながら不得手なので、正直に言いましょう。

私も、もしかしたら貴方も、どこへ行っても永遠に、ノイズであり続けるかもしれません。そしてどれだけ扉を叩いても、貴方に対して門が開かれることはないかもしれません。

この社会は、加害や差別に満ち満ちています。残念ながら、抗議は受け入れられることの方が稀ですし、また受け入れられたとしても、結果的にその場を追われてしまうこともしばしばあります。

それが抗議対象のマジョリティのみならず、自分が仲間と思っていた、差別意識を内面化してしまった同じマイノリティ当事者たちから行われることさえあります。

いつか疲れて、信仰の在り方も、SOGI の在り方も、そのほかのあらゆる社会にとって「不都合」とみなされた貴方の在り方すべても、何もかもを捨ててし

まうことを選択する日が来るかもしれません。
今ここに自分が生きていること自体が、誰かにとって迷惑になる、ノイズそのもののように思われるかもしれません。

それでも我々は、誰かを殺すことに自分を加担させるこの社会から、目を背けるわけにいかないのです。我々を殺す社会のために、死んでやるわけにはいかないのです。

だから我々はこれからも、ノイズとしてこの世界に存在し続けながら、あちこちで発されるあらゆるノイズを探し、受け取り続けてゆきましょう。
古くからの知恵と知識を紐解き、歴史を学び、新しい技術や理論を活用し、各々の生を通じて実践し考え、可能な限り繋がりながら、なんとかやっていきましょう。

同じノイズはこの世にひとつとしてありませんが、ノイズを起こすのは、きっと私や貴方が最初のひとりではないし、最後のひとりでもない。お互いに存在を知らなくても、同じ時代にいないとしても、我々はひとりではありません。

貴方が起こす唯一無二のノイズを、我々はいつでも待っています。
願わくば、我々の起こすノイズも、貴方に受け取って頂けるよう祈りながら。

LGBTQ 当事者としての
私のこれまで、これから

太田　利宏

はじめまして、太田利宏と申します。みなさまの3倍ほど長く生きているゲイです。私の仏教とのご縁、ここ半世紀の間で学校・職場で経験し感じたこと、職場でのカミングアウト、私の周囲の理解の広がり、多様性を大切にする企業などの取り組み、当事者をめぐる世の中の変化、私のこれからについてお話しさせてください。みなさま自身が将来を考えるとき、私のこれまでのライフストーリーを、みなさまが自分らしく生きるため、このような時どうしたらいいか考える参考例としてお読みいただけたら幸いです。

【自己紹介】

1961 年生まれ、岡山県出身、1980 年岡山大学に入学、1984 年から日本生活協同組合連合会（全国の COOP の横のつながり組織）に勤務、東京都世田谷区で暮らしています。高校で仲の良かった友人が龍谷大学に進学し、私は友人の下宿がある丹波橋に何度か遊びに行ったことがあります。

この年代になれば、親の見送り、自分の終活、パートナーのこの先など、見えにくいので不安が広がります。

その中で、たまたま LGBTQ への理解に取り組むお坊さま方とご縁があり、私のことをお話しし、LGBTQ 当事者を含むすべての人を寛容する仏教の教えをお聞きすることで、どう生きるかの指針をいただいています。これから大切

な母親を心を込めて見送り、パートナーと共に心静かに生き、私がパートナーに見送られ旅立つときを、仏教の教えに支えられ安心して迎えられたらと思っています。

【仏教とのご縁】

お坊さまとは、実家の仏事でお会いするだけでした。お盆や回忌で帰省した時に、お経をあげていただいて少しお話しするくらいで、近いとは言いきれない存在と感じていました。しかし、LGBTQ がおかれている社会的状況の課題解決に取り組まれる日蓮宗のお上人との偶然のご縁から、私の認識が変わりました。生きづらさを抱え自分らしく生きられない LGBTQ 当事者が、現世で性自認や性的指向に関わらず平等に成仏できること、当事者の悩みに寄り添うことで生きづらさを少しでも軽くすることに取り組まれるお上人がおられることに驚きました。そして、同じ取り組みをされるお上人の方々へご縁が広がり、仏教の多様性と寛容さを大切にする教義に触れることができました。

その後、浄土真宗をはじめ、各宗派のお坊さまたちが LGBTQ をとりまく偏見や差別の解消に取り組まれていることを知りました。日々の暮らしの中で大きな存在である仏教の、お坊さまや多くの信者に理解が広がることに、安心感を抱いています。シニアになると、自分の終活や旅立ち、葬送などが現実的な不安になってきます。

最期に自分らしく、パートナーに見守られて旅立ちたい気持ちを、本稿の後半に書かせていただきます。

【幼稚園～大学時代のこと】

幼稚園の時に同じ組の男子に憧れた記憶があります。小学校高学年、クラ

スで「女みたい」といじめられました。なぜそう見えるのか自分では分からず、我慢する以外どうしようもありませんでした。小学 6 年、授業中に隣の席の子と小声でクスッと笑ったとき、担任が「太田!そんなんだから、あんなことを言われるんだぞ」と怒られた記憶は、今でも鮮明です。中学で自分が「ホモ」なのを自覚しました。(「ホモ」は差別用語、使わないでください。当時は「ゲイ」という言葉を知りませんでした)。

高校 3 年の大学受験の合間に、大好きだったクラスメートに告白し、即失恋しました。大学の時、女子に恋をできればと思いましたが、親しい友人になれてもそれ以上の想いはどうしても生まれませんでした。

【クラスメートとの違い】

LGBTQ 当事者は子どもの頃、自分は周りと違うな、と気づく人が多いですね。私は小学校の頃に、男の子の友だちがいつもしていた缶蹴りや野球や模型飛行機などの仲間に、どうしても加わることができませんでした。粗雑っぽい男子キャラが主人公の漫画を読む気になりませんでした。友だちと何が違うんだろう?

少し大きくなって、恋愛や性にかかわる知識を少しずつ知り始めたころ、自分が何者なのかを知りたくて、辞書や辞典に答えを探しました。当時は「同性愛」を引くと「同性を愛し、同性に性欲を感じる異常性欲の一種」の意味でした。「異常」だと人に知られてはいけない。家族にも友だちにも秘密にし続けました。

高校生の時いつも「人はなぜ生きるのか」「生き物はなぜ存在しているのか」を考えていました。動物は子を産み、植物は実をつけ、自分の種を保存し未来につなげてゆく。人も、人間という種を絶やさないために、結婚して子ども

を産み育てることに意味があるかもしれない、それなら自分は何のために存在するのか？ 理由や目的を探しながら、なにも見出せないまま学生時代を過ごしていたように思います。

当時はテレビで観る当事者といえば、「女性っぽい」服を着たオカマ芸能人（差別用語なので使わないください）。独特の雰囲気を醸し、子どもの私は、ホモ（差別用語）はこんなイメージ、と思いました。

友だちや家族の視線や言葉を気にし、自分を出さず、できるだけ周りと同じふりをして溶け込もうとしていました。

【就職して】

当時は職場も社会も「異性が好き」「結婚して当たり前」が今以上に当然でした。就職して間がない私にとって、社会といえば職場でした。その頃と比べ、現在は社会での LGBTQ への認識や理解が広がったとはいえ、まだ「違っていて当たり前な多様性社会」とは言い切れず、職場も社会も、当事者は「隠さなくては」と感じる空気が続いていますね。

私の周囲では、このようなやりとりが続いていました。

・同僚との飲み会で「どんな女性がタイプ？」

・たまに残業なしで退勤するとき「今日は早いね、彼女とデート？」

・たまに顔を合わす元上司の挨拶はいつも「太田、結婚したか？」

・取引先の担当者が会食での話のきっかけに「太田さん、お子様はお幾つですか？」

・いつも会う商談相手から「ぜひ会って頂きたい女性がいます、紹介させてください！」

相手に悪気はなく、気軽なコミュニケーションのひとつ、良かれと思っての

言葉でしょうが、答えに窮する場面が沢山ありました。このような異性・結婚が前提の会話を、冗談や機転を交えて笑ってやり過ごすことができたら良かったのですが、私は誤魔化し、嘘をついてしのいでいました。

これから社会に出るみなさまも、似た場面に出会うことがあると思います。あらかじめ返答を準備して乗り切るのもひとつの方法ですし、誤魔化さずきちんと説明することで自分を貫くこともひとつです。周囲との調和と、ありたい自分を両方考えながら、職場で自分らしく生きる方法を探していただければと思います。

【親との関係】

私は家族にカミングアウトしていません。伝えると「こんなふうに産んだ自分のせいだ」と考えるタイプなので。だから両親は私が当然結婚するものと考え、見合い話を常に拒絶する私に大きな不安があったはずです。両親が持つ息子の当たり前の基準は、結婚し家庭を持つ、子どもを授かる、親に内孫を抱かせる、家を継ぐ、先祖のお墓を守り供養して当然、でした。30 代から 50 歳になる頃まで、岡山に帰省した時によく言い争いました。見合いしろ、しないの応酬で全く噛み合いません。いつも不満なまま、もの別れでした。私は、親の気持ちがよく分かります。でも私にはそれはできない。悲しかったですが、親も辛かったと思います。実家を出発するときにいつも父が最寄りの駅まで見送ってくれたのですが、言い争いしたあとの出発で、電車が出発する時に寂しそうな顔をして目を合わせない、こちらを見なかった父の横顔は、辛い記憶です。その父は他界し、母は独りで暮らしています。高齢なので心配ですが、私は東京で仕事を続けているため、毎日の電話と月 1 回の帰省、ALSOK の見守り・緊急駆けつけサービスで、離れたまま暮らしています。

この年齢になった私に母は結婚を口にしませんが、私が独りぼっちの寂しい老後を送る心配を口にしはじめました。私は「すぐ近くに頼りになる親しい友だちがいて、いつも世話になっている」と言い、ときどき「友だち」のことを話題にしています。母は心配を口にしなくなりました。 今では「一緒に食べて」と岡山の果物が「友だち」の分も届きます。母の旅立ちのとき、母の心残りが少し軽くなっていればいいと思います。

両親の口うるささは、家庭によって違います。見合いや結婚のことを全く言わない親御さんもいるそうです。一方、家業のため結婚を選ぶ当事者や、性的指向が異なるけれどきちんと結婚しておきたいという人もいます。家族のことを考えながらも、自分のこうありたいという想いを生き方に生かせるようになればと思います。

【社会のハードル】

社会の仕組みは異性愛が基本となっているので、当事者だから感じるハードルが、職場や社会のいろいろなところにあります。工夫して少し解決できることもありますが、法律や社会制度は乗り越えられず、仕方ないと諦めるしかないことがかなり沢山です。それをどう回避し、少しでも自分らしさを生かす方法がないかを考える場面がよくあります。

現在では、自治体がパートナーシップ・ファミリーシップの宣誓を受け付け、証明書を発行する、企業・団体が社内の夫婦・家族向け制度の対象を同性カップルやパートナーの子どもも家族として利用できるようにするなど、法律がLGBTQ 当事者を除外している場面以外は、ハードルが下がってきました。しかし、当事者が努力しなければいけない場面がまだ沢山あります。

医療機関は、大切な家族であるパートナーなのに他人として扱われること

を実感することが多い場所です。私は、入院・手術の際にパートナーを「弟」だと嘘の申告をしました。かかりつけの病院は、手術後の医師の説明は家族へのみ。コロナのため入院中の面会ができない上、入退院の付き添いを家族のみに限定しました。私には東京に親族がいませんし、一番近くにいてくれるのはパートナーです。「弟」が医師からの術後の説明を聞いて、母に電話しました。しかしこれは、幸運な例です。

今回のような事前に予定された手術ではなく、私がもしも突然倒れて意識をなくした時、私は「弟」だと嘘をつくこともできません。パートナーは他人扱いされ、手術室に近づくことも、主治医から話を聞くこともできません。遠方の高齢の母か、ふだんやりとりのない遠い親戚が東京に来て対応しなければなりません。そのような場合にどうするか？「医療意思表示書」の準備という方法があります。自分が意思を伝えられない場合に備え、自分の医療に関する希望をあらかじめ記す文書です。法律上の家族のみに対象を限定する病院に対し、パートナーへ家族と同様の対応を書面で求めることができます。ただ、法的拘束力や強制力はないので、残念ながら全ての医療機関で効力があるとはいえませんが、病院に対応を求める手段となります。

現在は越えられないハードルは他にも、同性パートナーやパートナーの子どもを健康保険の扶養家族にできない、所得税扶養控除の対象とならない、労災保険給付金を受け取れない、遺族年金の受給ができないなど、家族を守るための法律や制度が同性カップルやパートナーの子どもを対象にしていません。

【地方自治体の動き】

2015 年に渋谷区・世田谷区で始まったパートナーシップ宣誓制度は、

2024年2月までに392自治体に広がりました。同性パートナーに加えて、パートナーの子どもも家族とするファミリーシップ制度へのバージョンアップも進んでいます。制度では、公営の住宅や公立病院では家族とされます。受け取るパートナーシップ宣誓受領書・証明書を示すことで、生命保険や携帯電話の家族サービスなどを受けることが可能になりました。

また、自治体の制度の中に同性カップルが位置づけられたことで、当事者が社会で受け入れられていると実感でき、社会の中で自分らしく生きてよいのだという自信につなげることができます。私はパートナーと共に、世田谷区にパートナーシップ宣誓を行ない、パートナーシップ宣誓書受領証を受け取りました。区役所職員から「おめでとうございます」の言葉があり、自分がLGBTQ当事者として生まれて初めて言われたお祝いの言葉に、本当に感激しました。

それ以外にもたとえば世田谷区は独自に、自然災害で同性パートナーを亡くしたときの弔慰金や、災害支援で亡くなった場合の遺族補償をする制度を導入しています。同性パートナーや子どもを守る法律や制度がない中、さらに自治体の制度の充実が期待されます。

これらは行政サービスであり法律に守られる結婚とは大きく違いますが、LGBTQ当事者が自分で選択できる社会制度であり、活用したいものです。

【企業の動き】

2010年代に入り企業の中に、多様性やDE&Iを重視し、社会的責任を果たすため、組織としてLGBTQに関する取り組みを明確にし、宣言する動きが広がってきました。経営方針の柱に位置づけて、対外発信、社内規程や賃金・福利厚生制度の対象を同性カップルやパートナーの子どもへ拡大、社員教育

で組織内の理解と受容を拡大、Ally（当事者を理解・応援する人）の育成と活動支援など、さまざまな取り組みを行なっています。

企業の取り組みレベルを評価し認証する団体があり、参加企業は規準をクリアし認証を受けるため努力を重ねています。また、法律婚を支援するスタンスを表明する企業や、東京レインボープライドなど全国のプライドイベントへの協賛・出展する企業も増えています。

LGBTQ 当事者は、自分の知っている企業が自分達を理解する姿勢を持っていることに安心し、またその姿勢を持つ企業に興味を持つのではと思います。就活時の大きな指標になるでしょう。ただトップダウンの方針が企業内でどのくらい実施されているかは、それぞれの企業の事情で差があるようです。みなさまが就職先を考えるとき、社内でどのような取り組みが行なわれているか、多様性の理解が広がって当事者社員が安心して働けるか、同性パートナー・ファミリー制度自体が当事者社員にとって使いやすいものになっているか、などの情報が得られれば、より安心して就職後の生き方を考えながら就活できるのではないかと思います。

【当事者や Ally の動き】

トップダウン以外に、LGBTQ 当事者や Ally が起点のボトムアップで、企業の取り組みを拡げる動きもあります。ある電機メーカーでは、当事者社員が人事系部署に「結婚した人が使える社内制度が同性カップルは使えないのか」と問い合わせ、それが企業内の制度の見直しにつながりました。

私の友人で、金融系企業で働く Ally がいます。企業方針に LGBTQ 理解を据えているにもかかわらず、社内で具体的な取り組みが行なわれていませんでした。これではいけないと考え、友人は一人で行動を起こしました。経営

幹部に直接メールで、取り組みの必要性を訴えたのです。それを契機に、企業全体での取り組みが始まりました。

食品メーカーや流通業の会社の中には、当事者が労働組合に相談し、労働組合が経営側と協議して、社内の制度を同性カップルやその子どもが使えるようになった組織があります。私の働く日本生協連でも、同じ方法で制度が変わりました。

企業・団体が動くことに加え、さらに当事者や Ally が自ら動くことで、制度を変えることができます。みなさまも就職後に、各社の環境はそれぞれ異なりますが、可能な方法で働きやすさを考えてみてはいかがでしょうか。

【自分らしく生きるための動き】

現在、同性が結婚できなのは憲法違反だということを問う集団訴訟が続いています。「結婚の自由をすべての人に」訴訟は、大部分の地裁で憲法違反・違憲状態の判決が出ています。今後の判決が注目されます。

また、法律や差別の大きなハードルが立ちはだかり自分らしく生きられないトランスジェンダーが、性自認に沿った戸籍に変えるための厳しい要件が憲法違反であると訴えた訴訟では、性別移行には手術が必要とする非常に厳しい要件のうち、生殖能力を失わせることを最高裁は憲法違反としました。もうひとつの手術要件は残っていますが、一定の前進ができました。

これからも、理解を拡げ社会の認識を変え、当事者と非当事者の間の法律や社会制度の格差を縮める取り組みが必要です。

【私の職場カミングアウト】

私が日本生活協同組合連合会に就職したのは 1984 年、当事者は自分を

表に出さない時代でした。1985 年の「エイズパニック」では、男性同性愛者がエイズ（HIV）を広げているとされ、息を殺して生きていました。

1990 年代になり社会が動き始めました。1991～97 年の「東京府中青年の家」裁判で、「同性愛について行政当局の無関心・無責任は許されない」とする高裁判決が出ました。1994 年には日本初のレズビアン・ゲイパレードが開催されました。しかし私は、異性愛と結婚が前提の社会や職場の空気に流され、黙ったまま過ごしていました。

2000 年代に入り、カミングアウトした当事者が地方議会議員や国会議員に当選しはじめました。企業の LGBTQ 理解・支援の表明が広がり、2015 年には自治体パートナーシップ宣誓制度が始まりました。

ずっと黙っていた私ですが、社会の動きに支えられ、職場で少しでも LGBTQ 当事者が受け入れられないかと考え、2018 年から労働組合に要望を出し始めました。そして人事部にカミングアウトし、職場内の規程を同性カップルやパートナーの子どもにも、法律婚と同じ家族のための制度が適用されることを要望しやりとりを重ね、2022 年に LGBTQ 当事者も使えるように職場の制度が改訂されました。

私が声を上げたきっかけは、パートナーの病気でした。体調急変した時は病院に付き添うために、仕事を途中で抜けていました。法律婚配偶者やその家族の病気には職員が休暇や休業を取得することが制度で保障されているのに、同性カップルというだけでパートナーを守る制度が何もないことに疑問を感じました。もしそんな時に私に地方転勤が発令されたら、病気のパートナーを独り残して赴任できるのか、不安がありました。

職場制度の改訂後に、人事関連部署が業務で進めている職員が多様性

について関心や理解を深める取り組みに協力し、業務掲示板で当事者の想いを文章や動画で語るカミングアウトをしました。全員閲覧可能な場なので、少し緊張しました。

掲示板でのカミングアウト後、以前所属していた部署の同僚からのメールや同じ部署の職員からお祝いの言葉が届き、理解されていることを実感し、カミングアウトして良かったと思いました。

【私の職場での取り組み】

LGBTQ 理解に向け、各社でいろいろが実施されています。そのひとつの事例として、私の職場で行なわれていることを紹介します。これが最良とは言えませんし、今後も見直してゆかなければいけませんが、みなさまがこれから働くとき、みなさまの職場で取り組みがあれば比較対象にして、これからどのような取り組みがあればいいのか考える参考になればと思います。

人事部は、上記の制度の変更とともに、LGBTQ に関心を持つ職員が自由に交流するチャットコミュニティの開設、幹部のリアル学習会、職員全員対象のアーカイブ視聴学習、公式サイトでの取り組み発信、Ally を宣言する職員の募集とレインボーグッズの配布、広報誌に広く活動する LGBTQ 当事者のインタビュー掲載などを行なっています。

【職場内の Ally の広がり】

職場の Ally は、チャットコミュニティの中で、業務ではなく自主的に自由に交流しています。私は、当事者を職場で受け止めてくれる Ally の存在は非常に大きいと感じています。Ally は当事者を安心させる大きな力を持っています。

いつも、参加者それぞれの想うこと、面白かった映画やテレビ番組、イベント紹介・参加募集、自主学習会開催、参加したイベントや学習会の感想交流、ランチ会でがやがやと雑談などを行なっています。

Ally の輪は部署を越えて、別部署のお互い知らなかった同士に、LGBTQ 理解を接点に人間関係が広がっています。さらに Ally は仲間を拡げることが楽しいようで、現在他の企業・団体の Ally とつながっています。

みなさまが Ally になると、組織を越えた人間関係が広がるはずです。

【企業の枠を越えたつながり】

社会での理解の広がりを実感するのは、それぞれの企業だけではなく複数の企業・団体・行政の連携が始まっているという点です。

例えば、私の働く日本生協連の Ally 職員や私は「渋谷レインボーミーティング」に参加しています。これは、渋谷エリアで Ally 個人・企業・団体を増やすにはどうしたら良いかをテーマに、参加者同士、フラットな関係で社会課題解決に取り組むコレクティブインパクト（社会課題解決のための知識や技術を持ちより協力）を模索するイベントです。各企業・団体の取り組みや好事例をディスカッションし、情報交換を行なっています。

三井住友信託銀行、東急不動産の Ally 社員が呼びかけの中心となり、10 社ほどが交流しています。さらに自治体として渋谷区も加わり、区内のいくつかの大学との連携もすすめています。

また、いろいろな企業の Ally が企業の枠を越えて自主的に集まり、それぞれの会社で取り組んでいる LGBTQ 理解の取り組み方法を交流しスキルアップを目指す、参加自由な交流の場があります。当事者同士にも、企業の枠を越えて交流し、当事者が働きやすい職場を考えるつながりもあります。同じ地

域の当事者住民同士が交流し、住んでいる自治体の多様性に関する方針に対して住民の立場でパブリックコメントを出し、行政により良い施策を希望することに取り組む当事者団体もあります。

このように、いろいろな企業・団体、Ally、当事者がつながり、LGBTQ 理解の輪を社会に広げてゆくことに取り組んでいます。その仲間に加わるのは簡単で、各地のレインボープライドイベントや、LGBTQ 団体の催しでの出会いからつながりが広がっています。

本稿をお読みの当事者の方、Ally の方は、ぜひ出会いの場に出かけ、仲間に入っていただければと思います。それが、社会に理解を広げてゆく大きな手段なのです。

【結婚できないから行なえないこと】

みなさまには先のことですが、私のような年代だから考えることをお伝えします。最愛のパートナーと結婚し、幸せな日々を共に過ごすことは、多くの人が抱いている夢だと思います。同時に忘れてはならないのは、法律婚には、大切な家族を法律や社会制度で守ることができるようになるという、最大のメリットがあります。

しかし日本にはまだ、私が大切なパートナーを家族として守るための法律がありません。パートナーを守ろうとしても、法律や社会制度上は他人であり、法律婚では当たり前に可能なことが、LGBTQ 当事者には少しもできない社会です。職場、暮らし、病院、終活、旅立ち、葬送、法事、いろいろな場面で、異性同士なら普通にできることなのに、当事者にはほとんど不可能、一部の可能な対策を行うにしても努力が必要です。その時のために、当事者があらかじめ知っておくべきこと、実際にしなければならないことが沢山あります。

LGBTQ への理解は、地方自治体、企業・団体、仏教の多くの宗派などに、その輪が広がりつつあります。これは、私がみなさまと同じ年代だった頃とは比べものになりません。この先もどんどん広がり、LGBTQ 当事者が暮らしやすい社会になってゆくはずです。さらに、海外では既に広がっている同性婚が日本でもできるようになれば、ほとんどの生きづらさが解消します。できるだけ早く実現させたいですが、実現できるまでは、現在の法律や制度の中で、自分らしさを守るしかありません。

みなさまにとっては先のことですが、このような準備がないと当事者は安心して旅立てないかもしれない、ということを知っておいていただければと思います。また、これから仏教の道に進まれる方は、当事者がどのようなことを心配しているか、お寺としてどのようなことができるか考えるとき、参考にしていただければ幸いです。

【旅立つ前に準備する書類】

遺産相続では、大切な家族であるパートナーが他人として扱われます。何十年も共に生きても、パートナーには遺産相続権がなく、遺産を受け取ることはできません。これは法律で決められています。法定相続人は、配偶者や子どもがいない人の場合は、親・兄弟姉妹・甥姪です。法定相続人がいない場合は、遺産は全て国庫に納められます。

もし自分がパートナーよりも先に旅立つ時には、これまで共に助け合い生きてきた最愛のパートナーに遺産を渡したいです。しかし何も準備していないと、パートナーには1円も渡せません。全額を親戚が相続します。それを回避するための方法として、「遺言公正証書」の作成があります。誰に何を相続するか自分で具体的に決め、公証人役場で法的効力のある公正証書を作成しま

す。法的な基準をクリアした遺言を自分で準備するか、司法書士や行政書士に作成を依頼します。法定相続人には法的な最低限を相続する権利がありますが、それ以外は自由に決められます。パートナー以外にも、例えばボランティア団体や国際 NGO 団体に遺贈も可能です。自分が生きたことが、誰かの生きてゆくことにつなげられるのです。

私はこの年齢ですし、いつどうなるか分からないので、パートナーが相続人の遺言公正証書を作成しました。パートナーの安定した暮らしにつなげることで、旅立つ時に私が生きたことの意味を実感し、安心できるはずです。

安心して旅立つためには、意思能力が不十分で財産管理や病院の手続きなどの判断がつかなくなることに備える「任意後見契約」、旅立ったときの葬儀や埋葬・届出などを委託する「死後事務委任契約」、お墓などを管理する「祭祀主宰者の指定」も必要です。これは、パートナーが喪主になる場合も、葬儀支援サービス会社に任せる場合も、行なっておかなければなりません。

【旅立つ時のハードル】

自分が旅立つ時は、大切なパートナーや親しい友人に心置きなく見送ってもらいたいと考えます。また、自分が大切な家族であるパートナーを見送る時は、心を込めて見送り、心残りなく弔いたいと考えます。しかし、LGBTQ 当事者には越えなければならないハードルがあります。最良なのは、死後事務委任契約や遺言で、自分が旅立つ時はパートナーに喪主になってもらい、パートナーが旅立つ時は自分が喪主になることです。ただ、親族がいる場合は、調整が必要です。旅立ちのときに心を込めて見送り、見送られたいですが、パートナーや自分について生前に親族へ、どのような相手だと伝えていたかどうかで、大きな差異が出ます。最愛の人なのに、一般葬に知人のひとりとして参

列することが多いようです。さらに家族葬が増えてゆけば、見送りが無理なことが増えると思われます。できれば、最愛の人だから心を込めて、枕元で看取り、会葬で家族席に座り、納棺や骨揚げに立ち会い、法事に参列できるのが最良です。しかし、パートナーの親族が音信を遮断し、最愛の人の臨終を知らされない、参列の拒否、墓を教えられず参れないこともあるそうです。

【見送りの実例】

私の友人は、パートナーが突然倒れ入院後もしばらく意識がなく、連絡できず病状が分かりませんでした。一時的に意識を回復したときに大切な友人がいると親族に伝え、それからは見舞いができ、パートナーの最期を看取り、その後も上記の最良の形で供養ができているそうです。

私の友人の知り合いは、パートナーが倒れ、入院後に意識が回復することなく旅立ったそうです。入院中の様子が分からず親族に何度も問い合わせるうちに不審がられ、連絡を拒絶されたため、まったく様子が分かりませんでした。旅立ったことを知らず、パートナーの友人が同じ企業で働いていて、社内の掲示板に訃報が出たことを知り合いに伝え、旅立ったことが分かったそうです。法律婚ができない当事者の現実です。愛するパートナーを見送り、パートナーに見送られるため、親族に「パートナー」ではなくともせめて「大切な友だち」として紹介しておくことに大きな意味があります。

【性自認に沿った戒名】

トランスジェンダーの戒名について、仏教界で大きな注目を集め、各宗派で話されています。自分の性自認とおりに戒名を受け、性自認とおりに供養されたい、戒名はアイデンティティに大きく関わります。性自認のとおりに自分らしく

旅立つには、戒名について希望を自分でお寺や親族に伝えておくことが必要です。戒名の位号には女性・男性で違いがあり、宗派にもよりますが、女性は「大姉」「信女」、男性は「居士」「信士」が通常ですね。全日本仏教会は「仏教は死後の世界にジェンダーはない。男女別の戒名にこだわる必要はない」とされているそうです。また性別に拘らない位号も検討されていると聞いていますが、現実には女性・男性の戒名をつける場合がほとんどだそうですね。浄土真宗、浄土宗、日蓮宗、曹洞宗など各宗派で LGBTQ 学習会が開かれ、お坊さまの中でも論議されているとお聞きしています。トランスジェンダーが安心できる共通の位号が望まれます。

一般に故人の生前の希望や親族の希望によりお坊さまから戒名をいただきますが、トランスジェンダーはあらかじめお坊さまや親族に希望を伝えておく必要があります。もし旅立った後に故人の希望を知っていたパートナーがお寺や親族に本人の希望だったと伝えても、親族でないため対応が困難だそうです。トランスジェンダー本人がきちんと方法を知っておく必要があります。

【自分が旅立つとき】

トランスジェンダーが性自認に沿った自分らしい旅立ちをするためには、お寺や葬儀社の理解と、あらかじめ自分の希望を伝えておく必要があります。例えばエンゼルケア(入棺時の湯灌、そのときの装束・メイク) は性別により対応が違うそうですね。エンバーミングの希望があれば、親族である遺族の同意が必要で、旅立った後にパートナーが本人の希望だったと伝えても、対応が困難だそうです。

旅立つ時、自分が将来どう供養されるのかを決めておけたら安心です。あらかじめ死後事務委任契約や祭祀主宰者を指定しておき、希望をきちんと残

しておくことが必要です。誰にも手数をかけず、葬儀をしない、永代供養、樹木葬や散骨など選択肢が増えています。パートナーに供養してもらうなら、供養のしかたをあらかじめ相談しておくことが必要です。先祖墓には入らず将来はパートナーと同じお墓で眠りたいと考える当事者もいます。分骨しパートナーに手元供養されたい、パートナーが先に旅立ったら自分が手元で供養したい、当事者それぞれに希望があります。

私は、自分の見送りや法事を、パートナーにしてもらいたいと考えています。両親はすでに墓じまいをして、ロッカー式の納骨堂を契約済みです。両親と私と、「私の妻」の4人分の区画です。パートナーに私をそこに納めてもらい、親と眠りたいと考えます。さらに分骨して、パートナーが手元供養してくれたらと思っています。では、私が旅立ったあと、パートナーはどこで眠るでしょう。親族が決め、家族墓に納めるでしょう。私はパートナーの分骨をしてもらい、パートナーは私の「妻」用の場所で眠ってくれたらと考えますが、親族がそうしてくれることはないでしょう。もしパートナーが私よりも先に旅立ったとしたら、私はパートナーを、ただの知人として見送ることになるのでしょうか。分骨してもらい手元供養はできるのでしょうか。結婚ができない LGBTQ 当事者は、旅立った後にも悩みが続きます。

【法華経に感じる安心感】

私はいろいろな心配がある中、偶然のご縁で日蓮宗のお上人とお話しするようになりました。そして、仏教の教えは多様性が基本で、女性・男性など性別の差は取るに足らない。妙法蓮華経では寛容と多様性が説かれており、あらゆる命が等しく尊重される。男性も女性、少数者も多数者も分け隔てなく、全ての人が現世で平等に成仏できるとお聞きしました。「寛容の素晴らしさと大

切さ、寛容を守る勇気とその振る舞い方を、法華経は教えている」（岡田文弘先生）ともお聞きしています。社会には当事者のハードルがたくさんありますが、この教えを元にLGBTQ当事者に想いを寄せていただいていることに、心が安らぎました。

2023年の東京レインボープライドに出展された時の全国日蓮宗青年会の、「多様性を説くお釈迦様の教えを大切に、多様性を尊重するお寺へ相談しやすい環境を」の言葉が心に残りました。全日本仏教会の「レインボーステッカー」をお寺に貼る取り組みをされていることも心強く思っています。

当事者が自分を肯定し、自分が生きていることが尊いと考えられたら、悩み苦しみ自分を否定し、自死を考える当事者が減るのではと思います。二者択一ではない、仏教に流れる平等の教えに触れられたら、当事者は仏教に最初から受け入れられている！と感じると思います。そして、全ての人がお互いを寛容する心を持てば、当事者に対するヘイトや差別はなくなるでしょう。性自認・性的指向が違っても、分け隔てなく安らげる事を知りました。

【お寺のご理解への安心感】

若い頃の私にとってお寺は、檀家からお願いしお葬式や法事などをしていただく場所、初詣をする場所のイメージでした。実家には仏壇があるくらいで、普段の生活ではお寺の存在をあまり認識していませんでした。しかし仏教の各宗派で、LGBTQ 当事者が置かれている社会的状況の課題解決へ取り組みされていることを知り、また今回は龍谷大学で発行されている本冊子の原稿を執筆する機会をいただき、改めて仏教の懐の広さと、人が生きる時にいつも寄り添っていただける存在であることを認識できました。

多くの当事者が、自分を否定し苦しみながら生きています。仏教の教えを通

し当事者が自分を肯定し、現世の苦しみを越え、少しでも自分らしく生きられたらと思います。悩む当事者や家族は、仏教の多様性の心でお寺に寄り添っていただくことで、大きな安心を感じられると思います。

LGBTQ 当事者は、行政機関や福祉施設、医療機関、当事者団体などへ相談が可能ですが、「人生」「生きること」はお寺が良いと思います。当事者が自分自身や家族を含めた「人生」のことを相談したとき、お寺から他の機関にはない寄り添いと応援をいただき、当事者や家族は生きる時の安心を見つけられると思います。

【終わりに】

60 年あまりの年月での経験にはお伝えしたいことが多く、長文になってしまいました。お読みいただきありがとうございました。何十年かの間に社会がかなり変わり LGBTQ への理解は広がりましたが、これから卒業しそれぞれの方が様々な人生へ進まれる中で、当事者だから越えなければならないハードルが、まだいくつもあるかと思います。

わたしはひとりでは何もできませんでしたが、当事者の仲間や職場の Ally とのつながり、職場や社会や仏教の理解に励まされてきました。みなさまも、いろいろな人とつながり、想いを共有し、自分らしく生きられる社会の中で暮らしていただけたらと思います。

レインボー念珠

龍谷大学は、2023 年、東京レインボープライドに、学生と教職員が協力してブースを出展しました。ブースで何をするかというと、自分らしい色の珠を自分で選んで自分だけの念珠（数珠）をつくるワークショップ。念珠は、仏教の法要や儀式の際に用いる法具です。腕輪タイプなので、信仰にかかわらずブレスレットとしても普段使いできます。レインボー念珠と呼んでいますが、虹の色にこだわる必要はなく、一人ひとりちがって、どれもステキな組み合わせです。最後に親玉を結ぶところが難しいので、みなさん悪戦苦闘しながらも、熱心に念珠づくりとおしゃべりを楽しんでおられました。

東京レインボープライドの龍谷大学ブースにて

性的マイノリティの居場所創り

柴谷 宗叔

【苦しんだ子ども時代】

私は 1954 年、大阪市で生まれました。物心がついたころから、自分の性別に違和感を持っていました。男の子のする野球やサッカーには興味が持てず、かといっておままごとがしたいと思っても女の子は私が男と思っているので仲間に入れてくれません。次第に一人で図書室で本を読んで物語の空想の世界に浸るといった、暗い子でした。

父親は大正生まれの軍隊経験もあるような人でしたから、男は男らしくせよと、スパルタ教育。小学校低学年の時、母親が外出中に母のワンピースを着ているところを、近所の小母さんに見つかり、母に通報されました。母はどうしていいかわからず、父に相談したようでしたが、その後の父の反応といったら、殴る蹴るの乱暴を受けました。今でいう DV です。そのことがあってから、絶対に親には言えないと、自分の心の奥深く秘めていったのです。当時はまだ性同一性障害という言葉すらなく、同級生からは「オカマ、オカマ」といじめられ、先生にも友人にも相談できずに引きこもっていました。

中学に入ると、技術家庭や保健体育の授業は男女別。私は、本当は料理がしたいのに木工などをさせられ、体育の時間は仮病で保健室に逃げ込む始末。丸刈りに学生服というのも嫌で、セーラー服を着たくても着ることは許されず、心に秘めるばかり。高校でも同様でしたが、父から男らしくといわれていたこともあって、わざと粗暴にふるまってみたりという感じでした。物語の世界の仮想現実にのめりこむのは続いていて、今でいう文学少女だったのですけ

れど。そのおかげで、成績は良い方でした。

タレントのカルーセル麻紀さんがモロッコで性転換手術を受けたというのを週刊誌で読んで、そんなことができるんだ、私もいずれ性転換しようと心に誓ったのもこのころです。まさにカルーセル麻紀さんはあこがれの対象でした。

早く親元を離れて自由に生きたいと思い続けていましたから、大学受験に当たっては関西の大学は受けずに東京の大学しか受けませんでした。いわば合法的家出です。東京に出てからは一人暮らし、まさに水を得た魚。スーパーでスカートや化粧品を買ってきて、女装生活を始めました。女性雑誌をお手本に見様見真似の化粧を始め、女装して街に出かけました。雑誌で知った新宿２丁目界隈のお店に出入りし始めました。そのころはインターネットなんてなかったので、雑誌が貴重な情報源でした。

その手のお店、昔はゲイバーと言えば女装で接客する店のことだったんです。今は男性同性愛者の人たちの店ですけど。そこへ行けば私と同じ悩みを持った人たちが居ました。同類だから気軽に話ができる。化粧の仕方などもアドバイスしてくれる。徐々にお店に入り浸るようになりました。カウンターの中に入ってアルバイトもしました。

けれども、その道のプロにはならなかった。なぜかというと、お客さんは女性としての私を求めているのでなく男性器を持った女の子を求めていたのです。だんだんそのことがわかってくると、自然と足が遠のくようになっていきました。トランスジェンダーとゲイの違いがそれまでは判然としていなかったのが、わかってきたということでした。けれども当時としては混然としていたことも確かなのです。

大学を卒業してその業界に入らないとしたら、就職先を見つけないといけません。まだ性同一性障害などという概念もないころ、戸籍の性別で就職しなけ

ればなりませんでした。新聞社に入ったのは、漠然とマスコミ業界は自由な雰囲気があると思っていたからでした。ところが入ってみると堅固な男社会。女性記者すらまれというありさまでした。地方配属を経て大阪経済部に行ったのですが、企業のお偉方を取材するのですから、背広にネクタイという格好で、男を演じなければなりませんでした。これは苦痛でした。仕事が終わって、ゲイバーなどでこころを癒すという、二重生活を送っていました。休みの日は女装して気を紛らわせていました。

そんな折、労働組合の慰安旅行で和歌山県の那智勝浦に行きました。観光旅行だったのですが、そこに西国三十三所一番札所青岸渡寺がありました。それまで信仰心のない私でしたが、観光気分のスタンプラリーで、西国巡礼を始めることにしました。わずか 3 か月で 33 札所を巡り終えました。いまでいうご朱印ギャルのはしりだったのかもしれません。次に同じようなのはないかと探したら四国八十八ヶ所がありました。明石大橋が開通する前で、海の外への旅は時間がかかりましたが、足掛け 2 年で巡り終えました。それはそこで一応、終わっていたのです。

【震災が変えた人生】

私は神戸市東灘区の自宅から大阪の会社に通勤していました。1995 年 1 月 17 日、阪神淡路大震災。自宅は全壊、たまたま大阪に居た私は命だけは助かりました。けれども物はほとんどが灰塵に帰しました。仏教でいう「諸行無常」を身をもって体験したのです。これが私の人生を変えたのです。3 か月ほど経って瓦礫の中から物を取り出す作業をしていた時です。がれきの下から出てきたのがぼろぼろになった四国八十八ヶ所や西国三十三所の納経帳。一瞬、雷に打たれたような衝撃に襲われました。「ああ、この納経帳が身代わ

りになって、仏様が私の命を助けてくださったんだ」と思いました。「これはお礼参りにいかなくちゃいけない」と思い、傷んだ納経帳を表具屋で修理して、それを携えてまず、再び四国遍路に出かけました。

信仰心が薄かった私が仏門に入るきっかけとなりました。命を助けていただいたのだから今度は真剣に拝みながら巡りました。真剣に拝んでいると、ご縁がいただけるものです。愛媛県の 57 番札所の前住職から「4 回巡ったら先達に成れる」と教えていただきました。先達とはお遍路さんのガイド役。それならと 4 回巡って研修会を受け先達に成りました。今度はお遍路さんを案内しながら回るようになりました。

そこでまたご縁がいただけた。先達仲間のある方から「高野山大学の大学院に社会人コースができるから一緒に受けてみないか」と誘われました。まだ会社勤めをしていたので、無理だといったんは断ったのですが、なんと、その先達さんが入学願書を送ってきた。一緒に勉強する仲間がほしかったのでしょう。半ば誘われるがまま、受験し合格しました。神戸から週 1 回、往復 6 時間かけての遠距離通学が始まりました。通学は大変だったのですが、密教を勉強するのが楽しくて仕方がない。社会人コースは通常修士課程は就業年限が 2 年ですが、週 1 日の通学でも 8 年かけて修了すればいいというカリキュラムでした。けれども、二足のわらじは体力的に限界でした。2 年の後期に会社を辞め、高野山に移住しました。

私はお遍路にはまって四国は 130 周以上巡り元老大先達になりました。西国は 30 周以上で特任大先達です。なぜはまっていったかというと、お遍路さんの白装束には男物・女物の区別がないのです。コスプレじみた衣装ですが、それを着ていると性別を意識する必要がない。仏様の前では単なるお遍路さん。それが心安らいで「お四国病」になってしまったのです。社会貢献として

「四国八十八ヶ所ヘンロ小屋プロジェクトを支援する会」に参加、現在は副会長を務めさせていただいています。

会社を辞めて単なる学生になったのだから、もう男を演じる必要はないと、岡山大学病院に性同一性障害の治療に通い始め、診断書を持って大学当局にカミングアウト、女性としての生活を始めました。女人禁制の名残の残る高野山ですが、一部の方々を除いては好意的に接してくれ、現在に至ります。2010 年には性別適合手術を受け、戸籍と僧籍の性別変更をしました。僧籍簿の性別変更は高野山真言宗では初めてのことで、宗務総長権限でしていただきました。古い慣習の残る高野山としては、大変な英断だったと感謝しています。前例を作ったことで、後に続いて性別変更する僧侶も現れました。私の知っている範囲で 3 人おられます。

ネット上で僧侶が性転換してもいいのかと、非難を浴びせられたこともありました。けれども、周囲の多くの方々は理解してくださり、大学院では博士課程まで進み、博士（密教学）の学位を頂きました。僧侶としても、権少僧正、本山布教師などの資格を頂き、高野山大学では非常勤講師もしています。

僧侶の資格を取って、まず思ったのは、私の若いころと同じように誰にも言えず悩んでいる方々を助けること。そうした場を作りたいと願っていました。けれども世襲がほとんどとなっている中、寺を持つのは容易ではありません。地方に行けば無住の寺はありますが、人口の減る中、2軒3軒と兼務して何とか食べているという実態。なかなか手放してくれません。限界集落で数人しか檀家が居ない寺でも「若い男の坊さんなら来てほしいけど、年寄りの尼僧は要らない。まして性転換した人なんて」と言われるありさま。10 年ほど探して、ご縁を頂けず、それなら新寺建立しようと、寄付集めに奔走することとなりました。

2018 年度中に「性善寺」を建立するという目標を立て、600 万円ほど集

まりました。年度中ということは翌年 3 月までには完成させなければなりません。小さなお堂の計画だったので秋ごろの着工と目論見、工務店の相見積もりをとっている最中、お遍路仲間の先達さんから、お寺の空き物件があると教えていただき、5 年ほど放置されていた、大阪府守口市の浄峰寺というお寺を譲っていただけることとなりました。それが現在の性善寺です。

【性善寺での活動】

浄峰寺はどの宗派の本山にも属さない単立のお寺です。私自身は高野山真言宗の僧侶ですが、宗派にとらわれない活動をやりたいので、単立のままにしています。本尊は釈迦如来。1985 年に開創された寺で、代々尼僧が住持、私が 3 代目住職です。性善寺を創ると寄付を集めたので、性善寺を通称としています。通称を持つ寺は結構あります。たとえば川崎大師の正式名称は平間寺です。京都の東寺は教王護国寺です。

性善寺の名前の由来は、仏教における悉有仏性という性善説、つまりだれでも仏様に成れるという教えから採っています。また、性的指向や性自認などで悩みを持つ方に対して、それは問題ではない、善であると、教え導くことを目的としています。

私自身がトランスジェンダーで、若いころ悩みを相談する所が無かったので、そうした悩み相談を受け付けるのが第一の仕事です。安心して集える場所作りに心掛けています。毎月最終日曜日の縁日に相談会を設けています。また、月に 1 回、守口市役所でも人権相談をしています。

次に永代供養。多くのトランスジェンダーは性器を失くしているので子どもはできません。同性愛者の方々も基本、子どもはできません。最近は体外受精などで子どもができる例もありますがこれはごくまれなケース。基本は子ども

がいない。そうすると死んだあとに供養する人がいない。パートナーが居る方も先に死んだ方はパートナーに弔ってもらえるけど、後から死んだ方は同様に供養する人がいない。そこで、寺が永代にわたって供養する契約を生前に承って実行するというものです。

戒名は男女異なります。男なら信士・居士、女なら信女・大姉というわけです。死後にまで自分の望まない性を強制されるのは嫌だという方の為に、生前に望む性での戒名をつけましょうというわけです。戒名とは本来死後につけるものでなく、生きているうちに仏弟子になった証に師僧からいただくものなのです。

同性カップルの仏前結婚式も行います。寺で結婚式を挙げることができることを知っている方は少ないですが、可能です。ただ、まだこれについては実施に至っていません。若い方はどうしても教会がいいと思い込んでいるようです。

最終日曜日の縁日には、毎月 20 人ぐらいの方が来られます。午前 10 時から護摩祈祷をして皆様からの願い事を仏様に伝え、終了後、簡単な法話。その後、昼食に住職手作りのカレーを食べて、午後は相談会、懇親会となります。月によって異なりますが、深夜まで及ぶこともあります。始めたころはトランスジェンダー、ゲイ、レズビアンなどそれぞれのグループが固まっていました。また、私が永らくしてきたお遍路関係の巡礼者、さらには一般信者の方々と、グループごとに分かれて話をしていました。それが毎月会ううちに打ち解けて、最近では LGBTQ+の人がお遍路に行ってみたいと言うようになり、恐る恐る LGBTQ+を見ていた一般信者さんも打ち解けてきました。寺には障がい者や在日の方々も来られることがあります。いろんな方が集える場所として「みんなの寺」と称しています。お寺の中で目指していた多様性を認め合える社会

が実現したのです。これを広く社会に流布していくのが務めだと心新たにしています。

どんな悩み相談が多いかというと、若い人はまず就職の問題。戸籍と見かけが違ったらそこではねられてしまう。運よく就職できたにしても人事担当者はわかっていても、同僚がそのことを知るといじめの対象になる。休憩室でもゆっくりできないというような悩みがあります。更衣室やトイレの問題もまだまだ根強く残っています。高齢者は終活ですね。病院や介護施設での扱い、そして永代供養に至るまで、病院、施設、弁護士などと連携して安心して旅立てる介助をしていくプラン作りをしています。ここで注目すべきは永代供養の需要がLGBTQ+に限らず、身寄りのない独居老人のほうが多いこと、現代社会の足らない点を補うべきことからも承っています。

現在は堺市の高野山真言宗大鳥寺の住職も兼務しています。こちらは普通の信者寺ですが、私のことを聞きつけて、性善寺同様 LGBTQ+の当事者の方々も来られます。

【人権問題の現状】

人権差別の歴史を振り返ってみますと、昭和の戦前まで、人口の半分を占める女性が差別されていた。それが戦後憲法で男女同権がうたわれ、表面的には差別はしてはいけないことになった。けれども就職や賃金などでの差別は続き、男女雇用機会均等法でこれらの差別はしてはいけないことになりました。現在随分改善されてきては居ますが、まだ完全にはなくなってはいません。街で当たり前に車いすを見るようになりましたが、相変わらず障がい者に対する差別があります。国際化の進展で街で外国人を見かけることが増えました。人種や国籍による差別も同様に、してはいけないことはわかってはいても

完全には無くなってはいません。部落問題もしかりです。完全に無くすのは難しいかもしれませんが、人々の意識が変わっていけば社会全体が変わることは可能です。いろいろな差別は徐々になくなりつつあるなかで、性的マイノリティに対する人権問題はまだ端緒に着いたばかりなのです。当たり前に居る。多様化を認め合う社会こそが、私たちの理想とする社会なのです。

2023 年になってやっと成立した LGBT 理解増進法ですが、多くの問題点が指摘されています。2020 年の東京オリンピックを開催するにあたり、国際オリンピック委員会（IOC）から、日本におけるジェンダー平等に関する人権問題を解決するよう促され、慌てて、対応策を練るようになったが、後手後手に回ったことはご存じのとおりです。さらに 2023 年の G7 サミット（先進国首脳会議）を前に諸外国から、指摘されようやく成立にこぎつけたという経緯があります。

しかし、元々は自民党も含む超党派で作られた議員立法であるにもかかわらず、一部自民党保守派の圧力で修正されました。裏にはある宗教団体からの圧力があったともいわれていますが、差別禁止という文言や罰則規定がないなど、骨抜きにされたことは残念でなりません。理解増進という上から目線では、多様性を認める社会作りに資することは少ないと言えます。

同性婚についてですが、現在日本では法律的に夫婦と認められていません。公営住宅の入居や、病院での入院や手術の家族の合意にサインできない、臨終に立ち会えないなどの不具合が指摘されています。2015 年 4 月、東京都渋谷区で「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が、施行されました。以降、権利を認める自治体が増え、人口の半分以上をフォローするようにはなってきていますが、自治体の温度差もあり、国民全体を保護するに至っていません。また法的な配偶者ではないので、遺産相続の権

利も遺言などで明記しない限りありません。

憲法 24 条に「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。」とあり、その解釈を巡って学者の論点も分かれています。各地の同性婚訴訟でも、合憲、違憲の判断は分かれています。

2004 年 7 月、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が施行されました。特例法ができたことで、医師に性同一性障害と認定され、性別適合手術を受ければ戸籍を変えることができるようになりました。カルーセル麻紀さんがモロッコで手術をしたけれども、何度裁判所に申し立てても戸籍変更できなかったことを考えれば大きな進歩です。私も手術に踏み切ったのは戸籍を変えることができるようになったからでした。

けれども、性別変更するにあたっての条件が多々あり、改正論議が起こっています。1 つは子なし条項と言われるもので、未成年の子がいないことが条件とされています。子どもの保護の為に設けられた条文だとされています。私の知り合いで親に言われて結婚したが自身は MTF で離婚をして手術をしたにもかかわらず、子がいるからと戸籍変更が認められない。ところが実際は元妻が浮気して作った子で、DNA 鑑定の結果自分の子ではないと証明したけれども認められないと裁判中です。

もう 1 つは手術要件です。病気があるなどの理由で手術できない人にも戸籍変更を認めてほしいというものです。裁判で認められた例も出てきましたが、ここには大きな問題が潜んでいます。トランスジェンダーを排除しようとする人たちが、攻撃するための材料として、「男性器をつけたまま女湯に入っていい

のか」ということを、ことさら強調してヘイトを煽っているからです。トランスジェンダー自身が自覚してそのような行動をしなければ社会生活上問題はないのですが、議論の行く末を注視していかねばなりません。

男女差別の問題を積み残したまま、性的マイノリティの問題を考えようとすると、とんでもないことになる場合があり、危惧しています。たとえば高野山では明治の初めに女人禁制は解かれたけど、いまだに女性が入れない場所や参加できない行事があります。そのため、女性は山内寺院の住職になれないのです。宗規のどこにも書かれていないのですが、慣例としてそうなっています。私が僧侶の性別変更の口火を切ったため、その後知っている限りで 3 人の方が変更されました。

ここで問題となるのが、トランスジェンダーでない女性が、出世したいがために手術をして男性となったとしたらどうでしょうか。まさに本末転倒。まずは女人禁制を無くさないと、そんなケースがでてくるかもしれないと危惧しているのです。

【仏教とのかかわり】

私が僧侶なので、よく仏教的にはどうなのかと聞かれます。お釈迦さまも弘法大師空海さまもこのことについては想定外だったのか、はっきりとは言及していません。四万八千の法門がある仏教ですからどこかで言及されているかもしれませんが、はっきりとはわかりません。

仏教には僧侶に対して二百五十余りの戒律が記されています。その中でも大切な４つの戒を四波羅夷というのがあります。不殺生（人を殺してはいけない）、不偸盗（人のものを盗んではいけない）、不淫（セックスをしてはいけない）、不妄語（悟っても居ないのに悟ったと言ってはいけない）というのがあり

ます。3 番目の不淫戒は重要な戒律です。僧侶は異性とのセックスが禁止されているのです。同性愛も含まれるかどうかはここでは置いておきましょう。タイや中国など諸外国では守られていて、日本だけ守られていない戒律です。浄土真宗を開いた親鸞聖人が妻帯したことで浄土真宗では認めていたが他宗からは批判されていたのが、明治以降すべての宗派がそうなってしまい、諸外国から日本は仏教でないと批判されている部分です。

在家には不邪淫戒と言って、夫婦以外のセックス、不倫を禁じる戒律ですが、僧侶は不淫なのです。同性愛は想定外で、女人禁制の山にあっては隠れて行われていた可能性が強いといわれる部分です。鎌倉時代の『稚児観音縁起』にも記されています。在家一般には信長と森蘭丸のことが有名ですよね。つまり僧侶には異性愛は禁止されていたけど、同性愛は想定外だったということです。原始仏教の戒律に一部同性愛を禁止する条文があるようですが、あくまでここでは広い意味での不淫戒について述べました。

性別変更についてはどうでしょうか。法華経提婆達多品に、女性が男性になって成仏するということが書かれています。変成男子と言われる部分で「龍女忽然之間変成男子具菩薩行即往南方無垢世界」云々と書かれています。これは女性は罪障が多くそのままでは成仏できないので男になって成仏したと解釈されて、これまで女性蔑視の部分だとして女性運動家などから批判されてきました。しかし、日蓮上人は法華経全体として女性も成仏できると解釈しておられることから、このくだりについては、私は女性が男子に性転換しても成仏できたと解釈して、性別変更（性転換）を認める記述だと提唱します。仏典を始め、古典の解釈は時代とともに変わります。現代において性別変更しても成仏できると解釈した柴谷理論が、後世において主流となるべく、この解釈を機会あるごとに広めていきたいと思っています。

ちなみに、インドでは、ヒンドゥー教で、ヒジュラという存在が認められています。男でも女でもない中性の存在で、しばしば神の使いとされています。女装し神事を行うのが通例で、特別な存在として認められています。

弘法大師さまがどのような考えを持っておられたか、おそらく想定外だったので文書には残っていません。高野山真言宗が 2023 年 10 月に出したLGBTQ+に関する声明を参考までに揚げておきます。

<LGBTQ+について高野山真言宗宗務総長の声明>

多様性を認め合うことが仏の道にかなう

「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」（LGBT 理解増進法）が令和5年6月に施行されました。人間は、国籍、人種、出自や、障がいのあるなしなどによって差別されてはなりません。同様に、性別や性的指向、性自認によって差別されることはあってはならないのです。人間は生まれながらにしてみな平等です。お釈迦さまの説かれた仏教の教えの基本はまさにここに立脚しています。社会にはいろいろな人が暮らしています。多様性を認め合うことこそが、少数者だけでなく、多数者にとっても生きやすい社会なのです。それなのになぜ、偏見や差別が起きるのでしょう。それは、自分が人より優位に立ちたいという、おごった考えが心の中に生じるからです。

弘法大師さまは「人心には高下あり、仏道は不高下なり」（「一切経開題」）とおっしゃっています。「人の心が差別を生むのだ、仏教の根本には差別はない」ということです。この仏教の原点に返って、お互いを敬い相手の立場に立って物事を考えることが大切なのです。

高野山真言宗では、人と人との関係において「相互供養 相互礼拝」を

信条としています。相互供養とは、人と人がお互いに尊敬し養いあい、お互いの心の中にいる仏さまに対して真心を供養することです。相互礼拝とは人に対する心のこもった行為、お互いの存在を認め合い、思いやりの心で接することです。お互いが認め合い、助け合うことで、相手に対する感謝の気持ちを態度や心に出すということです。

また「悉有仏性」といって、人はみな仏さまになれる素質を持っています。けれども人それぞれ個性があり、得意なことも不得意なこともあります。自分と違うからと言って非難していたらきりがありません。それぞれのいいところを見つけ、相手の立場を尊重する。多様性を認め合うことから、お互いの信頼が生まれるのです。その社会こそが弘法大師さまが目指されたこの世の極楽浄土「密厳国土」なのです。

基本は人間の尊厳が守られる社会。多種多様な価値観がある中、人は皆かけがえのない「いのち」、仏性を持ってこの世界で共に生きています。人を見かけで判断するのでなく、相手の内面をしっかり見つめて、お互いに高め合っていける社会を作っていきましょう。

2023（令和5年）10月10日

高野山真言宗 宗務総長 今川 泰伸

【終わりに】

私が各地で講演や研修会の活動をしてきて思ったことを記しておきます。

ある小学校で、「LGBTの人と、どう接したらいいの？」という質問を受けました。答えは「別に特別な接し方をする必要はありません。普通に接してくれればいいのです」と答えました。前にも申した通り、何も特別な人間ではありません。多様性を認め合えるという心が身に着けば、左利きであろうと、肌の

色が違う人も、違う言葉をしゃべる人も、体や心に障がいのある人も、性的マイノリティも、みんな一緒なのです。同じように性自認や性的指向が異なる人もたくさんいます。みんながお互いに思いやりつつ共存していく、多様性を認め合える社会にしていこうではありませんか。

執筆者紹介

宮木 リー 啓輔（みやき りー けいすけ）

サンフランシスコ仏教会開教師補。サンフランシスコ市立総合病院専属チャプレン。龍谷大学文学研究科真宗学専攻修了。2008 年から本願寺尾崎別院を経て本願寺広島別院安芸教区教務所に勤務。2012 年に単身渡米。2016 年サンフランシスコ仏教会にて同性結婚。2018 年カリフォルニア州立大学サンフランシスコ大学病院にてチャプレンインターンシップを修了。2020 年より現職。

多賀 法華（たが のりか）

1979 年、島根県雲南市の山奥の寺の長女として生まれる。
2017 年から地元企業や小中高で LGBTQ 講演会を始める。
2021 年に島根のちょっこし LGBTQ 相談室を仲間とともに立ち上げた。
趣味は漫画を読むこと、銭太鼓、和太鼓、神楽。

釋 優 顯（しゃくゆうけん）

1996 年 愛知県生まれ。真宗大谷派僧侶。文学修士。現在、宗門関係学校特別非常勤講師。熱心な門徒であった曾祖父に連れられ、3 歳頃より聞法の会座に。小学 6 年生の時、縁あって浄土宗の一派にて得度。その後、やはり私には親鸞聖人の教えしかないと感じ、高校 2 年生のときに還俗。同 3 年生のとき大谷派にてあらためて得度、現在に至る。

楽丸 こぼね（らくまる こぼね）

神社関係者。神職資格取得後、奉職。神道 LGBTQ+連絡会の発起人の一人。
本屋 lighthouse「web 灯台にて」にて、宗教と差別に関する連載「信仰と LGBTQ+の交差点から」を担当。

太田 利宏（おおた としひろ）

1961 年岡山県生まれ、幼い頃から同性への憧れがあり、中学生でゲイであることを自覚。1980 年岡山大学に入学。1984 年日本生活協同組合連合会（全国の COOP の横のつながり組織）就職。業務の傍ら職場内や取引先、外部団体、地域の LGBTQ 当事者や Ally と交流している。東京都世田谷区在住。

柴谷 宗叔（しばたに そうしゅく）

1954 年大阪市生まれ。早稲田大卒。高野山大学院博士課程修了。博士（密教学）。読売新聞記者を経て、性善寺（浄峰寺）・大鳥寺住職、高野山大学非常勤講師、園田学園女子大学公開講座講師、巡礼遍路研究会会長、四国八十八ヶ所元老大先達。西国三十三所特任大先達、高野山本山布教師。著書に『四国遍路こころの旅路』（慶友社）、『江戸時代初期の四国遍路』（法蔵館）など。MTF トランスジェンダー。大阪府守口在住。

大学生のための LGBTQ＋ライフブック Vol.4
お坊さんたちのライフストーリーズ

発行日　2024 年 3 月 1 日
執筆者　宮木リー啓輔
多賀　法華
釋　優　顯
楽丸こぼね
太田　利宏
柴谷　宗叔
表紙絵　小西　智子

発　行　龍谷大学
編　集　龍谷大学宗教部
監　修　龍谷大学人権問題研究委員会
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町 67
電話　075-642-1111（代）
FAX　075-645-7939
https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/
syukyobu@ad.ryukoku.ac.jp

RYUKOKU
UNIVERSITY